FD report

Faculty Development

2018.3 Vol.11

同志社女子大学

FDレポート 第11号 2018.3

CONTENTS

◆ 巻頭言 ◆

『FDレポート』第11号の刊行によせて …… 学長 加賀裕郎 ◆ 1

◆ 2017年度FD講習会 ◆

講演「3つのポリシーと学習成果」

…… 同志社大学副学長・国際連携推進機構長 圓月勝博 ◆ 2

◆ アクティブ・ラーニング研究会 ◆

第8回「薬学教育における技能と態度領域の学習ー実習科目における実践ー」

…… 薬学部特別任用助教 川村暢幸 ◆ 9

◆ 教育開発実践報告 ◆

「学芸学部FD活動報告ー過去1年間を中心にー」

…… 学芸学部長 中村信博 ◆ 12

「現代社会学部のFD活動の試み」 …… 現代社会学部長 松崎正治 ◆ 12

「2017年度薬学部FD活動報告」 …… 薬学部医療薬学科主任 芝田信人 ◆ 13

「3年次生における科目別臨地実習の取り組み」

…… 看護学部長 岡山寧子 ◆ 14

「授業オープン化への取り組み：“Seeing is believing”」

…… 表象文化学部英語英文学科主任 若本夏美 ◆ 15

「Nプロジェクトー日本語日本文学科の取り組みについてー」

…… 表象文化学部日本語日本文学科主任 生井知子 ◆ 15

「調理系実習の概要と教育効果を高める取り組み」

…… 生活科学部教授 小切間美保 ◆ 16

◆ 授業に関するアンケート ◆

「2017年度春学期　授業に関するアンケート総評」

…… 教育開発支援センター長 大西秀之 ◆ 18

◆ ラーニング・コモンズ　利用報告 ◆ …… ◆ 31

◆ FD活動報告（2017年度）◆ …… ◆ 33

◆巻頭言◆

『FD レポート』第11号の刊行によせて

学長　**加賀　裕郎**

2016年４月に、教育開発支援センターが設置されて以来、本学のFD事業が次第に軌道に乗ってきたと思います。また『FD レポート』も号数を重ねて、11号を数えるまでになりました。近年はマナビーの講習会やアクティブ・ラーニング研究会、FD 講習会などが定期的に開催され、参加者もかなりの数に上るようになりました。その間の教務部及び教育開発支援センターのご尽力に、改めて謝意を表したいと思います。

2017年度の FD 講習会の講師には同志社大学の圓月勝博先生をお招きし、興味深いお話を伺いました。アクティブ・ラーニング研究会における本学教員の試みも興味深く、自分の授業に採り入れたいと思う試みが満載でした。

かつて大学は学問教授機関であり、教育機関であるという認識は比較的薄かったようですが、近年の大学は教育機関という性格が強くなってきました。各大学はアドミッション・ポリシー（AP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、ディプロマ・ポリシー（DP）という３つのポリシーを明確にし、それらに沿って体系的に教育研究活動を遂行することが求められます。特に近年は「教育の質保証」ということが強調されます。日本私立大学連盟、大学基準協会などの主催による各種セミナーでは、「教育の質保証」というテーマがしばしば取り上げられ、先進的な取り組みを行っている大学の事例報告を耳にする機会が増えました。

今年の１月20日に東京で行われた学長を対象としたセミナーも、「教育の質保証」をテーマにしていました。最初に講演を行った、リクルートの雑誌『カレッジマネジメント』の編集長は、大学に求められている社会的な要求や要請が変貌しつつあると述べていました。これからは経済のグローバル化が更に進展し、外国の大学で学んだ外国人、日本の大学で学んだ外国人が日本の企業で働くことが増え、また AI の急速な発展により、雇用状況が大きく変わると予想されます。そうしたなかで日本の大学で、どんな人物を育てるかが問われているようです。高大接続改革なども、そうした文脈で捉えられなければなりません。

事例報告では関西学院大学、広島大学、工学院大学の取り組みが紹介されていました。各々の大学は異なったミッションをもっています。関西学院大学はキリスト教主義の総合大学、広島大学は日本有数の研究大学、工学院大学は工学系の私立単科大学です。ミッションは違いますが、それぞれの大学が、独自性を発揮すべく努力されていることに感銘を受けました。「教育の質保証」という概念を定量的に明確化することは簡単ではありませんが、関西学院大学では、それを「学生の質保証」と捉え直して、在学生、卒業生を含めた「関西学院大学で学んだ人々の質」を明確にし、組織的にその質を高めるような長期計画―なんと20年間にわたる―を策定していました。本学でも AP、CP、DP が策定され、DWCLA10が定められ、FD 関連のセンターが組織され、「VISION150」も策定されました。建学の精神、ミッションも明確です。これらに基づいて、組織的な教育研究の質の改善に取り組まなければなりません。キャンパス整備の一環でラーニング・コモンズが整備されつつあり、今出川キャンパスでは、既に稼働しています。学生の新しい学びの場として利用されているようです。４月からは京田辺キャンパスもオープンします。各学部学科も、ラーニング・コモンズの活用を組み込んだカリキュラムの構築、授業のあり方に取り組む必要があると思います。今後の進展を期待して見守りたいと思います。

◆2017年度 FD 講習会◆

日時：2017年10月18日（水）16：00～17：30
場所：京田辺キャンパス　知徳館 C402 教室
司会：大西　秀之　教育開発支援センター長

1　開会の辞　　加賀　裕郎　学長
2　テ ー マ　　「３つのポリシーと学習成果」
3　講演講師　　圓月　勝博　氏
　　（同志社大学副学長、国際連携推進機構長、文学部教授）
4　質疑応答

講演「３つのポリシーと学習成果」

同志社大学副学長・国際連携推進機構長　**圓月　勝博**

圓月先生　同志社大学の圓月と申します。加賀学長から、過分のご紹介をいただき、大変光栄に存じます。今さら私などが同志社女子大学でお話をする機会を与えていただけるとは、想像もしておりませんでしたが、今年、大学コンソーシアム京都で若い方の場つなぎのために話をしたところ、お聞きくださっていた大西先生が声をかけてくださいました。どうも有難うございました。同志社女子大学では、もう10年ほど前になるでしょうか、お話しさせていただいたことがございます。やはり同志社の仲間ということで、とても親しみを感じています。拙い話にはなると思いますが、少しお付き合いいただきたいと思います。今日は教授会もおありだったそうで、お疲れだと思いますので、これ以上お疲れにならないようなお話を心がけます。

先ほど過分なご紹介をいただきましたが、正確に申しますと、私の専門は、シェイクスピアではなく、シェイクスピアと並び称せられるミルトンです。昔、同志社女子大学の学長をなさっていた越智先生に可愛がっていただきました。リベラル・アーツの精神を体現しておられるミルトン研究の第一人者でおられました。越智先生の学風を立派に継いでおられる小山先生のお顔も会場に見えますので、まるで古き良き昔に戻ってきたような気分です。素晴らしい先輩や仲間とともにミルトン研究をしてきたことには、もちろん、誇りを持っているのですが、残念ながら、伝統的な文学研究の成果がうまく若い学生に伝えられないことを実感することも多くなりました。そこで、現代の教育についても勉強しなければならないと思い、教育関係の企画にもかかわっているうちに、いつの間にかこのような場にも呼んでいただくことになりました。専門家ではありませんので、粗雑なところも多々あるとは思いますが、世情に疎い文学研究者でも、教育について一生懸命勉強しているようだから、自分もこれからも頑張ろう、と皆様が思うきっかけにしていただければ、それだけで本望です。

本日は、１時間半ほど時間をいただいております。これほどたくさんの先生に集まっていただいているとは予想しておりませんでしたが、昨今はアクティブ・ラーニングが流行でもありますので、最後に少し皆様に作業をしていただきながら、くつろいだ雰囲気で教育について語り合っていただきたいと思います。そこで、最初の１時間をレクチャー形式で行い、最後の半時間は、ワークショップ形式とさせていただきます。所属学部がばらつくようにわざと席を配置していただいています。違う学部の同僚と話してみることは、とても有益ですので、楽しんでいただければ幸いです。

「３つのポリシーと学習成果」というタイトルを挙げさせていただいています。このテーマを取り上げた理由を説明

した後、本論に入る予定をしています。３つのポリシーと学習成果と関連させながら、学習評価の基礎知識の確認もしましょう。教育の専門家なら、当たり前すぎて退屈かもしれませんが、少し我慢してお付き合いください。そして、それを実際にどのように授業実践につなげていくか、ということを考えてみたいと思います。その後、30分程度のワークショップを行います。同志社女子大学では、「アセスメント・ポリシー」という言葉を使って、非常に精緻なシラバス整備をなさっているので、この用語を使わせていただきますが、担当科目のアセスメント・ポリシーを作っていただきます。途中でわかりにくいところがあれば、どうぞお気軽にご質問などしてください。よろしくお願いします。

まず、本日は「３つのポリシー」を取り上げました。平成27年３月に文部科学省の省令が改正されて、３つのポリシーを明確にすることが必須となりました。同志社女子大学においても、今、「３つのポリシー」の整備に熱心に取り組んでおられるとうかがっています。共学は、14学部16研究科あるので、まだまだ調整不足の点もあるのですが、昨年、とりあえず基本的な整備を終えました。

この作業を終えた途端、今度はまた、今年の初めに省令が改正されて、平成31年から始まる大学入試改革などに向けて、アドミッション・ポリシーの再整備をする必要が出てきました。これが色々なものと関連づけられていて、例えば、FDやSDがここにも登場しています。そのような意味では、３つのポリシーに関する理解を高めるために、FD をするという本日の大西先生の企画は、大変適切なものだと思います。

ポリシーの策定にあたって、本日のもう一つのキーワードである学習成果が特に重視されています。最近、「ラーニング・アウトカムズ」という言葉も当たり前のように使われますが、学習成果を実際にどのように測るのかということは、分かったようで分からないところがあります。大学基準協会でも、頭を痛めています。学習成果が測定しやすい分野と、そうでない分野があります。国家試験がある分野では、数値で明確に出すぎて、それはそれでご苦労も多そうです。それに対して、芸術教育は、学習成果を数値化しにくい分野の筆頭でしょう。同志社女子大学には、看護から音楽まで色々な分野の教育が行われているので、それぞれの分野の特性を互いに理解することが大事でしょう。

３つのポリシーについては、既によくご存じだと思います。ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーのことです。学習プロセスとしては、アドミッション・ポリシーに従って選抜され、カリキュラム・ポリシーに従った教育を受け、そしてディプロマ・ポリシーに従って学位が与えられることになっています。ただし、作成プロセスとしては、ディプロマ・ポリシーから作ることが正しいとは言われています。このような学生を育てたい、というディプロマ・ポリシーがあって、その上で、このような学生を育てたいのなら、このような教育内容を整備するべきである、とカリキュラム・ポリシーを作り、最後に、このような教育内容で４年間（薬学部なら６年間）勉強していただくのなら、これだけの学力を持って入学してほしいというアドミッション・ポリシーを作っていきます。ですから、学習プロセスと作成プロセスが逆向きになります。大学としては、卒業するときに学生さんがどのような学力を身につけたか、ということを中心に考えていくことになっています。学習成果が一番大事になるのです。

ちなみに、学習成果の「学習」という字はこれで良いのか、ということを気になさる方が時折おられるので、簡単に確認しておきます。ディプロマ・ポリシーのときには、「学修」と書いてあります。正課教育で学んだときは、「学修」と表記するのに対して、正課外教育も含めた学びのときには、「学習」を使うのが原則です。ただし、同志社女子大学も力を入れておられるラーニング・コモンズでの学びのように、正課教育と正課外教育をシームレスにつなぐことが大事だという考えが主流になり、無理に区別する必要もないような気もします。そこで、私が作成した資料は、すべて「学習」で統一しています。ちなみに、大学基準協会でも、「学習」で統一することにしています。

次に、学習成果のところに「学力の３要素」と書いてあることに注目してください。１番目が知識・技能、２番目が思考力・判断力・表現力、３番目は色々な表現がありますが、大学教育関連文書には、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」と書いてあります。主体性と協働性ということですね。

従来の教育は１の要素に偏りすぎていたのではないかということがしばしば指摘されます。ですから、第２と第３の要素をどのように育成するかに注目が集まっています。アクティブ・ラーニングが教育改革の切り札のように言われるのは、このような背景があるからです。また、２番目の思考力・判断力・表現力に関しては、今、大学入試改革で記述式問題の導入が争点になっています。マークシートで正解を当てる試験ではなく、知識を使って何かを表現することに重点を移動させようというわけです。

同志社女子大学に呼んでいただくと、同志社マークの話ができるのが良いところです。同志社マークの３つの三角形は、知・徳・体をそれぞれ表しているとされています。こちらも、３つの理念の中で、リベラル・アーツと国際教育とキリスト教主義を挙げておられますが、もう一つの言い方として、知・徳・体があります。この徽章をデザインしたのは、湯浅半月という同志社初期の才人で、ミルトンの影響を受けた最初の日本詩人でもあり、ミルトン研究をしてきた私が誇りにしている創設期の同志社人の一人です。知・徳・体という全人格教育が同志社の伝統

です。知と徳と体は、学力の３要素にゆるやかに対応します。新島先生の教育家としてのご見識は、140年以上たった今になっても、通用するものがあるのではないかと思います。

本論に戻ります。学力の３要素の導入は、どこで決まったのでしょうか。勝手に誰かが言っているだけではないか。そんなことはありません。学校教育法が2007年に改正されましたが、第４章の「小学校」の第30条に「生涯にわたり学習する基盤が培われるように、まず基礎的な知識及び技能を習得させるとともに…これらを活用するために、思考力、判断力、表現力、その他の能力をはぐくみ、そして主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」とあります。学校教育法の「小学校」のところで定められたのです。これが2007年から始まったので、2013年に小学校を卒業された方は、この学力の３要素という学力観に従って、全ての教育を受けてこられたことになります。ということです。

また、学校教育法の「中学校」のところには、「小学校で得た学力」を伸ばしていくことが目的とされていますから、同じく学力の３要素を基にした教育を受けてきたということです。その中学生が卒業したのが2016年です。

なぜ平成31（2019）年がポイントになるかというと、更にその生徒が高校を卒業して、大学に進学してくる年だからです。高校は中学までに習得した学力を更に伸ばすことが目的です。大学については、学問の自由があるので、学習指導要領はありませんが、高校までに習得した学力を前提とした入試や授業をすることが強く求められるようになってきたわけです。

大学関係者は、大学改革という言葉をよく使いますが、最近、問題を大学に限らず、「教育の一体改革」という言い方がよくされます。大学関係者は、大学が一番強いと思っていますが、文部科学省の政策を見ていると、初等中等教育局が一番強いのだろうと思います。義務教育を管轄していて、理論的には全国民の教育に責任を持っていますから、基礎数と普遍性が違います。

小学校から大学まで一体的に見て、現代の日本の教育の中で、どこに課題が多いかと言うと、高校が難しいとおっしゃる専門家が多いようです。不登校やいじめなど多数の問題はありますが、小・中は義務教育なので、制度的には安定感はあります。その点、高校は、ダブル・スクールで猛烈に受験勉強している生徒もいれば、推薦入試以外は全く考えていない生徒、あるいは、大学進学を考えていない生徒も全体では半数近くいて、両極化が非常に激しいと言われます。ですから、高校を下と上からサポートしないと、日本の教育全体が機能しないのではないかという危機感があるのです。そこで、高大接続の改善とか入試改革が注目を集めているのです。大学教員も、高校までの教育について、できるだけ知っていることが大事なのです。

大学教員には、４つの仕事があると言われています。研究と教育と大学運営と社会貢献の４つです。大学教員は難しい仕事です。まず、それを自覚しましょう。

スポーツの世界に例えてみます。研究をしているとき、大学教員は現役の選手です。選手が常にトレーニングを続け、体力と技術の向上に努めて、他人にはできないパフォーマンスをして、すばらしい成績を残さなければならないことは言うまでもありません。

しかし、教育をしているときには、選手ではなく、コーチでなければなりません。コーチの目的は、自分が目立つことではなく、他人が目立つようにしてあげることです。まず、意識を切り替えないといけません。また、コーチングも専門技術です。しかし、従来の大学教員は、コーチングの研修を一度も受けずに経験知だけでコーチをしてきました。それは良くないだろうということで、コーチングの技術の基礎を勉強するために始まったのが初期のFDです。

本日のテーマである成績評価については、大学教員は、選手でもコーチでもなく、審判の役割をしています。審判というのもとても難しい職業で、多くの競技において、厳しいトレーニングを受けて、難しい試験をパスしないと、公式戦の審判にはなれません。もし判定に不明な点があったら、選手やファンに罵声を浴びせかけられたり、ライセンスを取り上げられたりすることさえあります。しかし、大学教員は、審判としての基礎知識さえなく、審判を続けてきました。審判の勉強もして、選手にもファンにも信頼される審判になる必要があります。本日のFDの目的はここにあります。

大学運営に関しては、大学教員は監督の役割です。監督は、コーチとも審判とも違う専門知識が必要です。選手だけではなくコーチを育成し、フロントと予算や人事のことで駆け引きもしなければなりません。チームの顔として、広報活動に率先して参加することも求められるでしょう。チームが良い成績を残せば、英雄扱いされますが、成績が悪ければ、責任を取って真っ先に辞任しなければならないことも珍しくありません。

４番目の社会貢献は、解説者などにあたるでしょうか。大学教員としての専門知識と経験を教育でもなく研究でもなく、社会の広範囲な人たちに伝えていく活動です。スポーツ番組を観ているとき、素人にもわかるように上手に説明してくれる解説者がいると、そのスポーツのファンが増えていきます。実は、今、私がしていることも、大学教員の業務としては、社会貢献に分類されるでしょう。教育業績にも研究業績にもなりませんが、自分が知ったことをできるだけ多くの人に伝えて、大学教育理解の裾野を広げていく仕事です。情報社会においては、良質の解説者のニーズは、ますます高まっていくでしょう。

私が良質の解説者かどうかは怪しいのですが、本日は、大学教員の審判としての技術、すなわち、成績評価について、簡単に解説していきましょう。評価には、色々な種類があります。まず、相対評価と絶対評価の区別があります。これは、10年ほど前、大学でも話題になりました。Ａは何パーセント、Ｂは何パーセント、Ｃは何パーセント、という具合にあらかじめ割合を決めておく評価です。法科大学院がブームになった頃、法科大学院は、相対評価を基本とすることになり、そのことから、相対評価が理想の評価であるという言い方をする人が今でもいます。昨日、韓国の訪問客とお話をしましたが、韓国は大学でも相対評価に近いそうです。企業も採用のとき大学の成績を重要な目安にするので、学生も成績にとても敏感だそうです。大学の成績が社会でも信頼されていることは、確かにとても良いことですが、少人数クラスなどで、成績分布の割合の厳守だけが授業の目的になると、教育的には弊害もあるとその韓国の方もおっしゃっておられました。それに対して、絶対評価は、あらかじめ定められた目標に到達したら、全員にＡをつけても良いという評価方法です。個々の学生の個性などを尊重することができる点で、人間的な教育が可能ですが、ともすると馴れ合いになり、評価に対する信頼性が低下します。

そこで、絶対評価の場合、到達目標の設定の妥当性が重要になります。最近、語学教育において注目されているものとして、語学の習熟度を定性的に規定したCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）がありますが、これもルーブリックの一種でしょう。NHKの語学番組のホームページをご覧になったら、とても良くできているものが掲載されているので、ご興味があればご参照ください。

段階別に評価する到達度評価に対して、認定評価と言われるものがあります。合格か不合格かを判定するだけで、段階はつけません。入学試験、卒業判定、免許資格試験も、その一例です。

学習評価は、どの段階で評価をするかによっても、種類があります。学習の初期段階で評価することを診断的評価と言います。プレイスメント・テストがその典型例です。それに対して、学習の中間段階で行うものは、形成的評価と呼ばれます。学習者の学習状況を把握するために行います。

一般に成績評価と言われているものは、総括的評価です。学習の最終段階で行い、学習者の学習成果を評価します。ここで、学習成果の測定方法が重要になるのです。大学基準協会でも、教育において、学習成果が大事であるということに関しては、何の異論もないのですが、それをどのように測定するかという問題になると、百家争鳴状態になります。国家試験がある場合なら、国家試験の合格率です。薬学部なら、これが重要になると一般的には言われるでしょう。ただし、国家試験の合格だけが大学教育の目標ではない、というお考えをお持ちの方もおられるでしょう。それはそれで、見識のある意見ですが、一般社会やご父母に理解していただけるかどうかについては、悩ましいところです。

国家試験などがない分野では、ポートフォリオが推奨されることが多くなりました。ただし、ポートフォリオは、学習あるいは指導の履歴ですので、これ自体が学習成果と呼べるかどうかについては、多くの異論があります。厳密に言うと、学習成果そのものを直接評価するものではなく、学習プロセスを間接的に評価する資料にすぎないのではないでしょうか。また、現実的に言って、ポートフォリオ作成は、多大の負担を伴いますので、肝心の授業準備にしわ寄せがきて、教員の疲弊感が増すという声もよく聞きます。ポートフォリオが無駄とは言いませんが、理念的にも実践的にも、万能の解決策ではないことは、確認しておいたほうがよさそうな気がします。

他の学習成果の測定方法として、卒業試験、卒業論文があります。音楽系などでは、卒業演奏をなさるところもあるとか。学生も教員も、負担感は大きいのですが、達成感も大きいのは事実です。ただし、達成感と学習成果が同じものかというと、それはまた話が別なような気もします。

最近、もう一つよく出てくるものは、IR（インスティチューショナル・リサーチ）です。ただし、IRとは何か、と言うと、答えは千差万別で、まさに同床異夢という言葉がぴったりです。そこで、大学基準協会では、評価基準の中にIRという言葉を入れることは控えています。また、IR室を設置することが学習成果の測定、という誤解が生まれると、かえって悪影響がある恐れもあります。さまざまなIRの手法にも学びながら、結局、学生と向き合いながら、それぞれの大学や分野の特性にふさわしい学習成果測定方法を地道に開発するしかないでしょう。

マスコミなどでは、就職率が学習成果の指標として紹介されることがよくあります。教育関係者は、これを指標にすることを嫌う傾向があります。教育内容や方法よりも、景気などの外的要因に左右されるから、教育とは関係がないという考えがあるからです。ただし、企業やご父母は、これが一番大事だと考えておられるので、社会と大学の関係のぎこちなさを表面化することにもなります。ちなみに、ボローニャ・プロセスでは、「エンプロイアビリティ」が一つのキーワードになっていました。たしかに、現代の教育論において、エンプロイアビリティを完全に無視することはできないでしょう。

同志社女子大学さんが整備に取り組んでおられるアセスメント・ポリシーというのが学習成果測定確立の王道ではないかと私は思っています。アセスメント・ポリシーがはっきりしていないと、評価文化が確立しないからです。

また、スポーツなどの例を見てみましょう。オリンピックの女子マラソンの代表者選考は、近年よく揉めています。どのような選考基準かというと、かなり混乱しています。代表枠は３名です。記録に関係なく３名選ぶのですから、相対評価です。陸連設定の標準記録が２時間22分30秒。これをクリアした選手がいたら、１名選ぶと規定されています。これは絶対評価です。ただし、選考競技会は４つあります。どうして代表枠の人数と選考競技会の回数をわざわざずらすのか。更に、世界陸上の入賞者は、その場で選考決定という例外ルールが設定されています。それ以外の代表選手は、どのようにして決まるかと言うと、「五輪で活躍できると評価された選手」と認められたら、選ばれると書いてあります。評価されることが評価基準になっています。これは揉めるな、と納得してしまいます。アセスメント・ポリシーがないのです。

ボクシングもよく揉めます。村田選手とエンダム選手の第１戦も揉めました。ボクシングには、５つの評価基準があります。有効打、手数、攻勢、防御、リングジェネラルシップです。客観的な数値で測定できるものは手数だけですが、村田選手は225発、エンダム選手は464発で、倍以上のパンチを出していました。他の評価基準では、おそらく、村田選手が圧倒していたのですが、審判のうち２人は、定量化された項目を最重要視したことになります。項目ごとの割合が決まっていない点が欠点です。

その点、良くできているのは、フィギュアスケートです。テレビ映えして、いまやオリンピックの華ですから、世界の視聴者を意識しているようです。僕が立派だと思うことは、解説者もとてもよく勉強なさっていて、「今の３回転サルコーは回転が足りなかったので、0.5から1.5の減点があるかもしれません」などと即座に説明できるということです。採点基準が関係者の中で共有されているのです。業界全体がものすごく頑張っています。大学も業界全体で頑張って、社会の信頼を築いていかなければなりません。

ピティナというピアノ・コンクールも良くできています。コンクール文化には功罪あるでしょうが、公平性と透明性を保つことによって、クラシック音楽を大衆に届けようという意欲が感じられます。評価項目が非常にわかりやすく示されているので、門外漢の私でもだいたいわかります。ピティナは、コンクールは競う場だけれども、教育の場でもあると規定して、このコンペティションでは指導者賞なども作っておられます。大衆文化の中の教育のあり方について、参考になる点が少なくありません。

このようなことを念頭に置いて、ワークシートをご覧ください。カリキュラム・ポリシーを踏まえた上で、アセスメント・ポリシーを定めて、どのような学習成果をどのような項目で測定するかを15分程度で書いてもらいます。その後の10分程度を使って、ワークシートを題材にして、テーブルごとに学習成果と成績について、意見交換をしてみましょう。その前にご質問があれば、お答えします。

司会　はい。時間も限られていますが、今のせっかくの圓月先生のご講演もあります。この後ワークシートもあるので、限られた時間ですが、何かこの機会にぜひとも、という参加者の方がいらっしゃれば、お願いいたします。大丈夫でしょうか。

それでは、せっかくのこのようなチャンスですので、ワークシートに取り組んでいただければと思います。一応、教育開発支援センターのほうで「３つのポリシー」の印刷物を用意していますが、この部屋は無線LANが飛んでいます。スマホ等でホームページを見ていただけると各学部・学科のポリシーもご確認いた

だけると思いますので、適宜そのようなものをご活用しながら、このワークシート、まさに今、目の前で出た宿題かと思いますので、進めていただければと思います。では、よろしくお願いします。先生、ありがとうございました。

圓月先生　どうもありがとうございました。ワークシートの完成度は問いません。教育についての意見交換を同僚と気楽にするきっかけにしてください。

司会　せっかくの機会ですので、「個人」と書いていますが、他学部・他学科の色々な職階の先生方と交流していただければと思います。

～グループワーク～

司会　ありがとうございました。ものすごく議論が盛り上がっているようですが、時間も限られてきましたので、圓月先生から、２、３の代表的なテーブルをコンパクトにお伺いしたいということです。圓月先生、どの学部・学科か、ご指名があれば、よろしくお願いします。

圓月先生　薬学と音楽の先生にご意見をいただけたら、おもしろいでしょうね。薬学は国家試験という学習目標が明確にある分野であるのに対して、音楽は学習目標が明確にあってはいけない芸術教育で、現代の大学教育の両極端だからです。

司会　では、適当にテーブルを指名していただけたらと思います。

圓月先生　薬学の先生、恥ずかしがらずに、手を挙げていただけますか。近いところを当てるとは限りません。

司会　先生方、ぜひお願いします。学生に挙手がない、積極性がないと嘆いているわれわれですので、何とぞ主体的にお願いします。

圓月先生　それでは、音楽の方はおられますか。はい。

椎名先生　何を言うのでしょうか。

圓月先生　どのようなことが論点になったかということ、先生が疑問に感じられたところや、違和感があったところや、色々あったら、何でも言っていただいて良いです。テーブルで話題になっていたことなどです。

椎名先生　論点になったことですか。

圓月先生　はい。

椎名先生　論点になっていることは、やはり学生が寝るので、それをいかに防ぐかということが論点になりました。非常にそれで話が白熱しました。

圓月先生　はい。ありがとうございます。私は関西人なので笑いを取るのが好きですが、授業でも笑いは必要だと思います。笑うと寝ないからです。ホルモンが出てきて、眠気が飛ぶそうです。泣き寝入りという言葉はありますが、笑い寝入りという言葉は聞いたことがありません。ユーモアをまじえて、楽しい授業をするのが一番効果的だと思います。

薬学の先生にご発言いただき、国家試験がある分野のご苦労をうかがって、まとめに代えようと思っていました。学習成果が測定できても苦労はあるし、測定できなくても苦労はある。結局、苦労なしには教育はできない、ということだけを確認しておきましょう。時間になったので、このあたりで終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

司会　はい。それでは、圓月先生、ありがとうございました。また、先生方、長い時間、ありがとうございました。このような機会、まだまだ話題は尽きないと思いますが、これを一つの刺激に、来年度のシラバス、また授業評価等をお考えいただければと思います。もう時間になりましたので、2017年度同志社女子大学 FD 講習会を終了させていただきたいと思います。改めまして、本日ご講演いただいた圓月先生に拍手をいただければと思います。

圓月先生　どうもありがとうございました。

司会　あと、先生方、申し訳ありませんが、出席兼アンケートをよろしくお願いします。本日の評価基準になります。

◆アクティブ・ラーニング研究会◆

◇第８回アクティブ・ラーニング研究会

日　時：2018年１月24日（水）16：30～17：30
場　所：京田辺キャンパス　知徳館 C283 教室
報告者：薬学部特別任用助教　川村　暢幸

薬学教育における技能と態度領域の学習―実習科目における実践―

薬学部特別任用助教　**川村　暢幸**

はじめに

2005年４月、本学に薬学部が設置されてから、2018年３月で13年を迎えます。この13年間は全国の薬学部にとって大きな変革のまっただ中にあり、現在もこの変革は続いています。全国的な薬学教育改革の流れの中で求められるようになってきた、知識・技能・態度を統合した薬剤師としてのパフォーマンスを伸ばしていくための教育について、第８回アクティブ・ラーニング研究会におきまして、実習科目の中での取り組み事例を紹介させていただきました。本稿ではこの報告内容についてまとめ、改めて考えてみたいと思います。

１．薬学教育改革の流れと実習における技能・態度領域の学習

1992年の医療法第二次改正をきっかけとして、全国の薬学関係者の間で、臨床薬学教育の強化を目指す動きが活発化し、実務実習の必修化、修業年限問題に関する検討などを経て、2006年度より６年制薬学教育がスタートしました。６年制薬学教育の開始と同時に、“命”に関わるプロフェッショナルの養成のために臨床を重視した“全人的教育と一体となった専門教育”を行うことが薬学部に課された責任となりました。知識に関しては従来から薬学部教育で重点的に行われてきましたが、技能と態度については従来の４年制課程においてはそれほど重視されていなかったと言っても良いかと思います。しかし６年制課程においては、知識に加えて、技能・態度の教育が求められています。特に態度の領域（例えば、医療の進歩に伴う倫理的問題など）について深く考える姿勢を養うためには、一度講義を聞いただけ、一度実習を行っただけでは足りません。初年次教育の段階から開始し、多角的に何度もアプローチする必要があります。このような観点から、筆者の参画する初年次段階の実習科目においても、知識的な部分の定着を図りつつ、技能・態度の領域について学習できるような工夫を行っています。

２．生化学実習における取り組み

ａ．プロトコール（実験記録）を書く

本実習に際してあらかじめ配布している実習書には、実習中の操作内容について詳細に記しており、実習書を見るだけで、実験操作ができるように記載をしておりますが、受講生には、更に自分で手順部分についてプロトコールを書いてきてもらい、そのプロトコールを見ながら、随時記載を加えつつ実習に取り組んでもらっています。本格的な実験を行ったことのない２年次生にも、実験器具や操作が分かりやすくなるように、実験操作等の動画を用意し、Office365等を通じて配信しプロトコールを書く助けとしています。

単に実験を記録するだけでなく、実験記録の重要性、客観的視点による観察と論理的な思考、実験結果の誠実な評価といった点について重点的に指導し、科学者としての基本的な素養を身につける機会とするため、実習中随時、また実験終了時に個人面談という形でプロトコールの確認を行っています。プロトコールの記述と動画の閲覧により実習内容の理解が深まり、積極的な取り組みにつながっています。

b．ヒトの遺伝子を扱う

本実習では、アルコールの代謝に関与する ALDH 2遺伝子の遺伝子型を決定しています。他ならぬ受講生自分自身の遺伝子型を決定します。また「遺伝子診断」についてのレポート提出を課しています。実習で取り扱う遺伝子はアルコール代謝に関与する身近な遺伝子と言えますが、本来、究極の個人情報とも言える遺伝情報の取扱いには極めて慎重な姿勢が求められ、今後ますます医療の中で遺伝情報を応用した治療が盛んになっていくと予想される中で、薬剤師として患者さんの遺伝情報にどのように対峙するかは、身につけておくべき態度と言えます。

実習書記載の「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針（厚生労働省）」を読み、本実習への「参加同意書」を提出することにより、遺伝情報を取り扱う際に注意が必要であるという意識の喚起を行っています。受講生から提出されたレポート課題では、多くの学生が「出生前診断」や「乳がんの原因遺伝子」について記述し、遺伝子診断の危険性、遺伝子検査結果を受けての意志決定の難しさ、守秘義務、といった点について言及しており、遺伝情報取扱いに必要な姿勢について学んでいます。更に、受講生本人の遺伝子型を調べるという内容から、実習自体に興味を持ってもらいやすく、より積極的に実習に取り組む姿勢につながっています。

c．４年次生を教える側に

薬学部の研究室には３年次秋学期から研究室配属という形で学生が配属され、研究活動を行っています。そこで４年次生にチューターとして本実習に参画してもらっています。実習中に実験操作などのサポートやレポート課題（アルデヒドデヒドロゲナーゼ酵素単位タンパク質量あたりの代謝活性と遺伝子型の関連）についてのミニ講義を行ってもらっています。

受講生からすると、気軽に聞くことのできる先輩のサポートは実習の助けとなっています。４年次生によるミニ講義の内容はよくまとまっており、あえてミニ講義資料の配付は行っていないにもかかわらず、ほとんどの受講生が正しい内容のレポート課題を提出している事実から、ミニ講義内容の断片的な記憶から、自主学習によりレポートを完成させることが可能であることを示しています。

４年次生からは教えることが楽しい、あるいは、教えることで自分がより深く理解できたという感想が聞かれ、次世代を教育する能力やプレゼンテーション能力のアップに効果が見られます。更に４年次生においては、研究室に参画しているという自覚を醸成でき、その後の積極的な研究活動につながっています。

３．動物解剖実習（早期体験学習Ⅰ）における取り組み

医療人たる薬剤師の育成を目的とするのであれば、薬学部も人体解剖実習を取り入れるべきであると筆者は考えておりますが、諸般の事情から現実的ではありません。代替法として多くの薬学部で解剖学的知識の定着を目的としてラットやマウスの動物解剖実習を行っています。生体のマウスを用いて実習を行うという機会は、学生にとって生命倫理等について深く考える絶好の機会となり得ます。

動物解剖実習は動物実験であるため、動物愛護管理法（環境省）等の理念を基に制定された同志社女子大学動物実験等実施規程、動物実験委員会規程に則って行っています。実習書には動物実験基本指針（文部科学省）を記載し、熟読するよう指導すると共に、動物実験者としての心構えや動物福祉に配慮することが求められていること、及び後日開催される実験動物記念式への参加を指導しています。

動物の生命を犠牲にする以上、より教育効果を上げる努力が必要なのは言うまでもありません。動物の命をもらって学習していることを明確に伝えると共に、実物を実際に観るという経験により知識がより定着しやすくなるという点を説明することにより、解剖実習を行うことの意義を理解し、積極的に参加しようとする姿勢に結びつけています。また、実習書を予習・復習可能な形に工夫すること、本実習の流れに即した動画を用意し閲覧するよう指導することにより、より知識が定着しやすいように工夫をしています。

知識的な部分がどれぐらい定着したのかについて､実習の前と後でプレアンケート・ポストアンケートを実施し、可視化をしています。この結果についてはマナビーを通じて受講生に掲示しています。実習への取り組みによって確かに知識的な部分でポジティブに作用するということを実感してもらい、以降の学習の動機づけにつなげてもらいたいと考えています。

実習後の感想には、「動物の命をもらって学習していることを忘れないようにしたい」「この先もしっかり勉強していくことで責任を果たしたい」といった内容の記述が多く観られ、生命倫理や薬剤師としての責任感につながる感覚を養ってくれていると感じています。

終わりに

薬学部教育は、薬剤師国家試験合格率との兼ね合いのため、とかく知識偏重になりがちです。しかし、本学の薬学部に入学する層や昨今の学生気質等を踏まえて考えると、知識的な部分を自ら学習するという姿勢が希薄と思われます。闇雲に勉強しろとけしかけてもなかなか自発的な学習に結びつきません。一方、技能・態度領域について

はとても興味を示す学生が多いのも事実です。

社会からの要請に基づいて始まった技能と態度領域の教育ですが、少し観点を変えると、技能や態度領域について興味を持って積極的に参加してもらう中で、薬剤師となるためには知識的な部分も必要であるという気づきの機会を持ち、知識領域も含めた自発的な学習（アクティブ・ラーニング）につなげていく、ポジティブなスパイラルを構築していくという点において、技能と態度領域の教育は非常に有用な手段の一つであると考えています。

最後に、両実習を一緒に遂行していただいている関係諸先生方、準備等いただきました教務課の方々に深く御礼申し上げます。

※2018年２月21日（水）に開催した第９回アクティブ・ラーニング研究会の報告「学生主体の英語劇上演への取り組み―『シェイクスピア・プロダクション』の歩みと現状―」は、第12号に掲載予定です。

◆教育開発実践報告◆

◇学芸学部

学芸学部 FD 活動報告―過去１年間を中心に―

学芸学部長　**中村　信博**

学芸学部は、音楽学科、情報メディア学科（メディア創造学科）、国際教養学科の３学科から構成されている。現在 FD 活動をつづけている情報メディア学科と国際教養学科及び学芸学部 FD の現状を報告する。

情報メディア学科においては、年１回程度、FD 研究会を開催して、専任又は嘱託講師による発題と全体討議とを続けている。多くの場合は、教員が担当する科目のシラバス、カリキュラムにおける位置づけ、目的、工夫、実際の授業例、受講生の反応、成果などが報告され、その後、全体での質疑と協議を行っている。また、ときには教員の研究テーマについても紹介され、教育内容高度化への提言にもなってきた。その結果、多岐にわたる問題意識と検討課題とが蓄積・共有化され、様々な改良への契機となっている。直近の学科 FD については、後述の学部 FD 研究会に合同して実施したので、そこで述べる。

国際教養学科では、スキル（Speaking, Listening, Reading, Writing）系クラス担当者全員によって、１）授業方法の標準化、評価、改善、２）ICT を利用したコミュニケーション、３）受講生の実態的英語力の把握と具体的な指導、４）受講生の学習状況共有化などの点から授業の質的向上を目指して担当者相互の円滑な連携を図っている。学期末には全受講生の英語技能に関して客観的な評価に基づく長所と改善点とが記入された Feedback sheet が国際教養演習担当者（Advisor）を通じて全履修学生に配付されることになっている。こうしてスキル系クラス担当者において実施されている FD は、結果的にすべての学科教員においても共有され、学科全体の教育にも大きな効果を生んでいる。

さて、先述した情報メディア学科 FD と合同して開催した学部 FD 研究会であるが、今回は、学部としては３回目の研究会（2017年３月15日）となったものである。「情報メディア学科基礎演習―社会構成主義的な教育アプローチの試み」との主題で基礎演習担当の川田隆雄教授によって報告された。シラバスやカリキュラム上の位置づけなどにとどまらず、アクティブ・ラーニングを応用して構成されている基礎演習の教育理念の背景についても丁寧な考察が示された。途中から共同担当者の森公一教授、本報告者も加わって授業の実際が紹介され、他学科教員からも受講生への動機づけ、共同学習への誘導などを中心に感想と質問とが寄せられた。2018年度入学生からのメディア創造学科への名称変更に伴う新カリキュラムにおいては、現行の基礎演習を基礎演習Ａと変更し、更に基礎演習Ｂ、基礎演習Ｃを加えることになっている。学部、学科において FD を繰り返しながら、このような導入期教育の理念を更に拡充したいと合意した結果である。

また、このように回を重ねつつある学部 FD 研究会の具体的な成果として、2017年度秋学期に開講した学部ジョイント・プログラムの成果をあげたい。佐伯林規江教授（国際教養学科）の担当によって英語ミュージカル上演に至る総合的かつ実践的な科目となった。クラスでは３学科の学びが活かされ、多くの教員からも協力と支援を得ることができた。これまで、分野の相違もあって、「学芸」という名を冠した学部への帰属意識は学科へのそれに比してはるかに希薄ではあったが、このような試みをつづけながら、更に創造的な学芸学部のあるべき教育を模索したいと考えている。

今回は音楽学科としての正式な、あるいは組織的な FD 活動について報告することができなかったが、他の２学科の実践と学部 FD 研究会の成果が良い刺激となっていると確信している。

◇現代社会学部

現代社会学部の FD 活動の試み

現代社会学部長　**松崎　正治**

現代社会学部では、「チョコっと FD」という名称で、学部教員会議の開始直前に10分間の FD 研修を2017年度から始めた。日常的、継続的、簡単にちょこっと行える FD 活動を学部全体で行いたいと考えたからである。

まず、やり方である。くじ引きで決められた順で、毎回２名の教員が、自分の実践について４分間話す。他の聞き手の教員は、コメントカードに１分間で数行コメントを書く。チョコレートの包装紙に応援メッセージを書けるものがあるが、聞き手のうち２名はコメントカードの代わりに、このチョコにメッセージを書く。チョコは、発表者にメッセージを読んでもらうと共に味わってもらう媒体である。これが、「チョコっと FD」という名称にした所以である。

これらのコメントやチョコを集めて、報告者の２名に渡す。報告者はそれを読んで、「振り返り」を数行書く。この振り返りは、次回の学部教員会議の前に、〈報告者氏名・タイトル・振り返り〉の一覧表形式で、配布される。

次に、これまでの報告者とタイトルを紹介しておこう（敬称略）。

①５月11日：才藤千津子「〈聖書〉科目では何をどう教えているか」、Lisa Rogers「専門演習 : Perceptions & Stereotypes」

②６月８日：埋橋玲子「保育士課程 / 実習指導について」、朱捷「グループディスカッションのバージョンアップ」

③７月６日：加藤敦「授業改善は Plan・Do・スベッタ・Action！」、長岡延孝「リベラルアーツを掲げる本学でコモンセンスを形成する一つの試み」

④９月28日：鈴木尊明「民法の考え方～価値観を揺るがす学習」、Calum Adamson「Multiple learning goals and Model UN」

⑤11月２日：山田邦和「実物資料を使った歴史教育」、福岡久美子「理解度を知る試み」

最後に、「チョコっと FD」を始めてから気づいたことを三点挙げてみよう。（まだ学部構成員に成果と課題を問うに至っておらず、私個人の印象であることをお断りしておく。）

（１）学部の教員が、それぞれどんな授業をしているのかをお互いに知り合えるようになり、学科や学部の抽象的なカリキュラムの全体像が、具体的に目に見えてきた。これは、カリキュラム改定などの時にも役立つ。

（２）授業の工夫に刺激されて、自分の授業改善のヒントに至ることがある。例えば、山田先生は、各地の寺社の絵馬を集めて教材とし、そこに描かれている絵から歴史的な事象に切り込んでおられる。概念（歴史）をひとつに凝縮している具体物（絵馬）の重要性を知った。

（３）学修共同体としての学部構成員を相互に意識し、授業相互の関係を作ることにつながる。あの先生がこんなことを１年生の授業でしておられるのだったら、それを受けて私の２年生の授業では、こんな風に発展させることができるかなとか、授業間のつながりを次第に考えるようになってきた。

以上のように、現代社会学部の「チョコっと FD」は、少しずつであるが、継続中である。

◇薬学部

2017年度薬学部 FD 活動報告

薬学部医療薬学科主任　**芝田　信人**

2014年度の薬学第三者評価において、薬学教育で「改善すべき課題」として、１）「ヒューマニズム・医療倫理教育」、「コミュニケーション能力・自己表現能力を修得する教育」に含まれる科目について、目標達成度を評価するための指標を設定し、それに基づいて評価を行うこと、２）問題解決能力の醸成を目指す科目について、それぞれの目標に対する到達度の明確な指標を立て、それに基づいて評価を行なう体制を整えること、更には、2021年度の薬学第三者評価への目標として、「基礎薬学教育」と「臨床薬学教育」の融合を念頭とした薬学教育の展開が要求されている。したがって、薬学の基礎系教員及び臨床系教員が一丸となって薬学教育改革に取り組むことが更に要求されることとなった。第２回目

の薬学 FD 講習会では、学生の学習効果を高める手立てとしてどのような方策があるかを考えるため、まず各教員が自身の講義方法を見つめなおすための機会とした。第２回薬学 FD の講師として、はたらく人、学生のメンタルクリニック院長、産業医科大学精神医学教室非常勤講師の西井重超先生をお招きし、「～いまさら聞けないを解決する～教員になるときに誰も教えてくれなかったいまどき学生への伝え方」と題して講演をしていただいた。薬学部教員35名が拝聴した。

講習会ではまず、「いまどき学生の気質」と「教員が絶対にしてはいけないこと」を説明していただいた。講義を行う上で最も大事なことは相手にあった話をすることであった。本人と関係のない話や本人の知識レベルにあわない話は当事者意識が芽生えにくいということであった。ともすれば、こんなことぐらいわかっているだろうと思って省略してしまう場合があるが、それは何割かの学生の理解を欠いてしまっているという。いけていない授業の学生の評価は、・プリント教科書の丸読み・プリント教科書の丸読ませ・何が伝えたいのかわからない・ポイントがわからない・話が長い・簡潔に話してほしい・自分の興味のある分野だけを喋る・写経・教科書・プリントを行き来する・あちこちに飛ぶ・禁止系ルールをつくる・つまらない授業なのに寝ていると怒る・よく当てる・当てて答えられなかったら怒る・先生が高圧的・偉そう､であった｡一方､良い授業と言うのは､・具体例・体験談が多い・使える知識がある・ポイントがわかりやすい・難しい単語や文章の意味を１つ１つ説明してくれる・生徒のレベルに合わせた授業をしてくれる、であった。ともすれば、教員は「いけていない授業」を実施しがちであるということが改めて認識でき、学生が思う「良い授業」を実施するためのノウハウについても講演していただいた。特に、パワーポイントを使用する場合、学習者が認識でき、効果的に伝えうる文字数はほぼ決まっており、また、配布するプリントはパワーポイントとあわせておき、後で学習できるように配慮するなど、ごく基本的な事項が学生のやる気につなげることが出来るとのことであった。紹介された事例は、各教員が担当する講義を即座改善しうる方法ばかりで、とても有益であった。

◇看護学部

３年次生における科目別臨地実習の取り組み

看護学部長　**岡山　寧子**

看護学部は、今年で開設３年目を迎え、本学の教育理念のもと、幅広い視野と豊かな人間性を兼ね備えるとともに、専門的な知識・技術・態度はもとより科学的な思考に基づいた課題解決力、主体的・創造的な看護実践力を育成することを目指している。中でも、看護実践力が大きく培われる臨地実習を通して、学生達は大きく成長していると実感する。本学部の臨地実習は、必修科目で基礎看護学実習（１・２年次生、３単位)、科目別臨地実習（３年次生17単位)、看護実践総合実習（４年次生、３単位)、選択科目に公衆衛生看護学実習（４年次生、５単位)、養護実習（４年次生、５単位）を配置している。看護学教育では、「看護を実践できる」ことを目指しているため、臨地実習は非常に重要で、文部科学省への学部設置申請時に実習施設の確保、指導や教育体制の明確化なども厳格に審査された。ここでは、2017年度初めて実施の科目別臨地実習の取り組みについて報告する。

１．科目別臨地実習の計画・具体的な調整や準備

科目別臨地実習は、成人急性期看護学（３単位)、成人慢性期看護学（３単位)、精神看護学（２単位)、小児看護学（２単位)、ウイメンズヘルス（２単位)、高齢者看護学（３単位)、在宅看護学（２単位）の各実習科目から構成され、グループごとに学生を配置し、３年次秋学期全期間を通じて実施する。学部開設時から、実習施設との実質的な調整を開始、2016年度からは、学部の臨地実習委員会などを中心に、臨地実習要綱や各科目の実習要項の作成など､実習全体の運営調整を行った｡各科目担当者は実習施設との実施計画・指導調整・教員の施設研修など、実際的な準備をした。この間、実習目的である「既習の知識・技術・態度を実習の場面で活用し、あらゆる健康レベルにある人々への援助を通して、看護の機能・役割とその可能性への理解を深め、看護活動を展開する基礎的な実践能力を養う」ために、どのような実習展開が効果的なのかを模索しつつ、教員間で実習に対する教育観や看護観を少しでも共有し、相互理解を深められるよう、準備状況報告や実習展開についての意見交換を実施しながら進めた。

２．科目別臨地実習の実施

科目別臨地実習導入として２回のオリエンテーションを実施した。２回目は実習開始直前の週に、各科目オリエ

ンテーション、看護 OSCE、「医療安全管理および個人情報保護」「臨地実習でのヒヤリハット」の講義、「チーム医療」シンポジウム、実習施設関係者との交流会などを集中的に実施し、学生・教員共に実習モチベーションを高めることができた。

実習がスタートしてからは、予想外の出来事も生じており、そのたびに状況を把握し、意見を集約しながら解決策を見いだしてきた。その中で、実習成果や課題も少しずつみえはじめてきた。例えば、臨地実習は、実習を受け入れる施設のご協力やご指導なくしては成り立たない。実習施設は総合・中規模病院、介護保険施設、訪問看護ステーションなど、数も多く多岐にわたり、指導体制も様々である。その中で教員がいかに実習先との連携を深めて教育していくのか、そのためには何が必要なのかなど、実習施設とのより教育的な関係づくりへの努力の必要性を改めて感じている。また、各担当教員は長年の様々な臨地実習の教育キャリアを持ち、それぞれの教育観・看護観を土台にして実習指導に当たっている。それは、学生にとっては幅広く、奥深い学びにつながる一方で、「先生達の言うことはバラバラで混乱する」という学生からの指摘も受けている。学部としての実習目的をふまえ、教員間相互の報告・連絡・相談を積み重ねながら、どのようにしたら、学生にとって学び多き臨地実習となるのかを共に考えることの重要性を痛感している。加えて、現代のいわゆる「さとり世代」の学生達とどう向き合ったら良いのか戸惑いを隠せない教員も多い。これらの課題に積極的に取り組むために、今後 FD 活動をますます進めていきたいと考えている。2018年３月20日には、「現代の学生にどう向き合い、教育を行うのか」をテーマに「さとり世代」の学生の具体的な事例を共有しながら、学生にどう向き合い、看護を教えるのかを考える FD 研修を開催する。

◇表象文化学部

授業オープン化への取り組み：“Seeing is believing”

表象文化学部英語英文学科主任　**若本　夏美**

「１分間だけ先生の授業をビデオ撮影させてください」

以前、同志社女子大学の FD で実施されていた授業参観という秀逸な制度が廃止されて愕然としていた私が、代替を考えていた際に思いついたのが、ビデオ撮影による授業交流である。しかし「先生の授業風景を撮影させてください」などと直球の依頼をするとおそらく「私は授業の達人ではない」「アクティブ・ラーニングの部分がない」「盛り上がっていない」などの理由をつけてほとんど却下されることだろう。でも「１分間だけ」と条件を付けると逆になかなか断りにくいのも人情というものだ。

事実この２年間で授業撮影をさせていただいた14名の専任教員による代表的な授業は以下の通り（敬称略）。「Reading（AES）（北尾）」「Active Listening（今井）」「Public Speaking（AESA）（﨑）」「Writing Skills（松村）（辻）」「CALL English（風間）」「Studies in English（若本）」「Topics in English D（Clayton）」「英米文学基礎ゼミナール（玉田）」「ファンタジーの系譜（小山）」「アメリカ文化史（湊）」「Shakespeare Production（Medlock）」「Senior Seminar（甲元）（Carpenter）」

ビデオを見せていただいて感じるのは、最近流行りのアクティブ・ラーニングの範疇を凌駕した各先生の独特の魅力である。例えば普段同僚として聞いている声と教室での声は格段に異なる（工夫がなされている）。まさに「百聞は一見にしかず」である。各先生の世界がそこにある。

これは英語英文学科事務室の茂木さんという優秀なスタッフの協力によって実現していることであるが、どの学科でも不可能ではない。また副産物として、オープンキャンパスで紹介することもでき、１シーンは１分間ではあっても結果的に５シーンくらい撮らせていただくので授業の全体像がわかるという利点もついてくる。

FD は映像で切るとなかなか良い切れ味になることを実感している。

Ｎプロジェクト―日本語日本文学科の取り組みについて―

表象文化学部日本語日本文学科主任　**生井　知子**

2016年度に、「宮沢賢治プロジェクト」（Ｍプロ）について取り上げたので、その後の状況についてご報告したいと思う。

「宮沢賢治プロジェクト」は、「日学の学生達も舞台を作りたい」という願いの下、2014年３月に栄光館で第１回

目の公演を実現したことに始まる。15年、16年、17年と、これまで４回の公演を実施してきた。賢治の作品を、演劇や朗読などの形で立体化するというものだ。

第４回目の公演を「芥川龍之介からの挑戦状」と銘打ち、賢治と龍之介の対決という形にしたこともあり、他の作家も取り上げたいという声が高まった。そこで、今年度から、名称も日学のＮを用いて「Ｎプロジェクト」と改め、より広い可能性を模索することになった。18年３月２日には、栄光館で「Ｎプロ１ st 公演　～ようこそ、文豪達の狂宴へ～」をお届けする予定である。

これまでの課題であった演劇教育の不足を補うため、今年度からは「演劇と演技Ⅰ・Ⅱ」という授業も開講し、演劇についての基礎的な訓練も行っている。

しかしながら、「演劇と演技Ⅰ・Ⅱ」の受講生と「Ｎプロジェクト」の参加メンバーは必ずしもイコールではない。授業は取りたくても、課外活動まではやりたくないという学生も多い。そこで、活動の内容を多くの学生に知って貰うために、10月に小公演「よだかのほし」を行った。場所は、オープンしたての楽真館ラーニング・コモンズのイベントエリア。新しい施設の可能性を探るための試みでもある。

イベントエリアの良い点は、栄光館と比べ演じる人と観客との距離が近く、細かい表情も伝わりやすいし一体感がある所だ。しかし、開かれた空間であるため、無関係な人の話し声や物音が邪魔になり、演じる側も見る側も集中しにくい。ブレーカーが落ちる可能性があるので、照明も本格的には使えない。音響もあまり大きくすると、他のエリアで作業をしている人の邪魔になる。積極的に今後使っていくには、かなりの問題点があった。

前回も書いたことだが、今出川には演劇の授業や公演にふさわしい場所がない。使い勝手の良い小ホール、演劇にも使えるような教室を作ることはできないものだろうか。

◇生活科学部

調理系実習の概要と教育効果を高める取り組み

生活科学部教授　**小切間　美保**

生活科学部では、人間生活学科と食物栄養科学科の２学科があり、両学科に共通する実習科目の一つに調理科学実習Ⅰ、Ⅱがある。また、食物栄養科学科はその特性から、これら以外にも調理系の実習が複数ある。本稿では、この調理系実習における取り組みについて紹介する。

１．調理系実習の科目について

（１）調理科学実習Ⅰ及びⅡ

人間生活学科２年次に選択科目として配置。家庭科教諭免許取得を目指す学生については必修。

食物栄養科学科１年次必修科目として配置。１年次の導入科目としての役割も果たしている。

（２）調理科学実習Ⅲ及びⅣ

食物科学専攻の３年次生において必修。１年次科目より高度な調理手法と理論を学ぶ科目。

（３）食事計画実習、給食経営管理実習、応用栄養学実習、臨床栄養学実習Ｂ

管理栄養士専攻の２～３年次必修科目。食事計画実習と給食経営管理実習は大量調理の理論と実践を学ぶ科目。応用栄養学実習はライフステージ別の栄養管理について学び、臨床栄養学実習Ｂは糖尿病食や腎臓病食などの治療食を学ぶ科目である。

２．取り組みについて

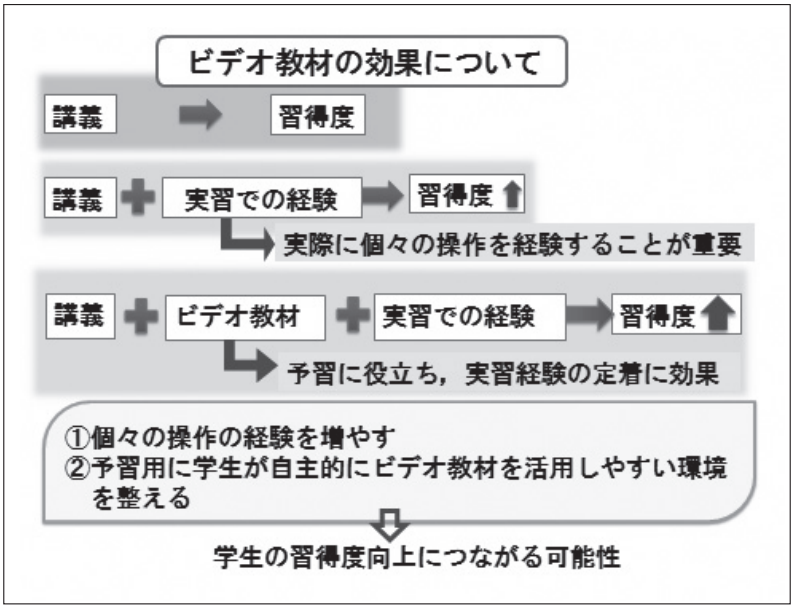
（１）教員の連携

調理系の実習の単位数は多く、またクラス数も多いことから、専任教員３名と嘱託講師８名の合計11名がかかわっている。それぞれの実習科目を担当する専任教員同士が日常的に連携をとり、教育内容の調整を図り、更にそれを嘱託講師の先生にもご理解いただいている。また、１年次科目である調理科学実習Ⅰ、Ⅱでは、基本的なレポートの書き方を丁寧に指導している。これは調理系に限らず、全ての実験・実習科目の基礎づくりの役割を担っており、他の科目の教員からの情報も踏まえて毎年改良した指導がなされ、大変な努力を要している。詳細については、食物栄養科学科村上恵先生から「2015年度のアクティブ・ラーニング実践報告」でご発表いただいたので割愛する。

（２）習得度調査の実施・評価とマナビーでの写真やビデオ教材の活用

最近の取り組みとして、食事計画実習と給食経営管理実習での FD 活動を紹介する。これらの実習科目は内容が密接に関連しており、同じ実習室で行われクラスも同一である。１年間かけて特定給食施設での栄養管理、大量調理の衛生管理・作業管理などを体得し、食事設計力を養う。特に衛生管理は食中毒を予防するため大変重要な事項であるが、経験のない学生にとって難関となっている。担当の神田知子先生を中心に、2014年から衛生管理に関する手技や重要ポイント、失敗例などを含む写真やビデオ教材を、学生の予習のために提供している。それまでも授業で見せて解説していたが、効果があるようなないような、という状況であった。

そこで、ビデオ教材導入の前と後の習得度（学生による自己評価）を分析したところ、実際にその操作を自ら行った体験の有無が効果を示し、さらにビデオ教材の使用によって効果が増すという結果が得られた（図参照）。学生のレポートにも「ビデオ教材で実習直前に自宅で予習できたので良かった」という記載を複数認めた。この経験を受け、2017年度には更にマナビーに動画を増やして積極的な活用を促し、前後の比較を行っている。今回は衛生管理のみでなく予習のポイントや実習中のコミュニケーションのとり方など評価項目を増やした。教材作成は大変な労力であるが、学生の理解を助け、目に見えて効果が上がると実感している。



図：ビデオ教材活用による教育効果

３．まとめ

本稿では調理系実習について紹介したが、生活科学部では実験実習、学外での実習、フィールドワークなどの体験学習やマナビーの活用を行っており、それぞれに教員の工夫がみられる。今後もこのような努力を継続し、学生の教育につなげていきたいと考えている。

◆授業に関するアンケート◆

「2017年度春学期　授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長　**大西秀之**

はじめに

2017年度より、授業に関するアンケートの見直しが行われ、その内容が大幅に変更されました。授業に関するアンケートは、これまでにも何度か見直しが行われ変更が重ねられてきました。例えば、直近では、2013年度に質問を15項目から10項目に削減するとともに、ディプロマ・ポリシーに基づくDWCLA10の獲得を問う質問が加わりました。こうした変更は、その時々の大学を取り巻く内外の要望・情勢に対応すべく、様々な試行錯誤の下に行われてきました。

今回の変更の目的も昨今の大学改革と多分に関係するものとなっています。まず重要な目的として、従来行われてきた個々の授業の改善に加え、ディプロマ・ポリシーに掲げる学科ごとの到達目標の達成度の測定があげられます。加えて、学生の学修行動の把握も昨今重視されてきています。このような目的のため、今年度の授業に関するアンケートから、「授業改善」、「学修行動」、「到達目標」の３区分を設け質問を行うこととなりました。もう一つの重要な目的として、アクティブ・ラーニングの重要性の確認があげられます。アクティブ・ラーニングに関しては、様々な考え方や取り組みがありますが、今回の改善では特に学生の理解度を確認しながら授業を進めること、フィードバックを丁寧に行うことなどを重視し、そのための工夫や実践がどの程度行われているか計測することを試みました。

上記の目的は、「質の保証」や「学習成果の可視化」など、現在大学教育に求められている一連の改革に関係するものとなっています。したがって、大学そのものの認証評価にもダイレクトにかかわる取り組みにほかなりません。このため、今後授業に関するアンケートは、個々の授業の改善は言うまでもなく、各学科のディプロマ・ポリシーに掲げられている到達目標の達成度を測るためのエビデンスとして、大学の認証評価に活用することも重要な役割となると考えています。

このような理念の下、今回の授業に関するアンケートから、個々の科目の学修行動と到達目標の達成度に関するデータを学科単位で集計し、それらのデータを学科全体として分析していただくことになりました。こうした分析は、ディプロマ・ポリシーの達成度をはじめ、学科全体として授業内容の現状把握と改善点の確認などを目的として行っていただくことを期待しています。

以上のような背景から、今回の「総評」は、単に授業の改善状況の総括ではなく、学科ごとの分析を踏まえた上で、到達目標の達成度を学科間で比較しながら分析することにより、本学の総合的な教育力そのものの評価となることを目指しました。今後は、「総評」の集計・分析結果が学科全体の改善に積極的に活用され、その結果として大学の認証評価にも寄与するものとなるよう、実績を重ねて行くことが不可欠になると考えています。

言うまでもなく、授業に関するアンケートは、基本的に学生の主観を問うものであり、決して客観指標となるものではありません。授業に関するアンケートは、絶対的な指標などではなく、授業改善に向けその内容自体についても常に修正を加えて行く必要があります。そういった意味でも、各学科・各科目区分が今回のアンケート結果を、どのように評価されているかも重要な検討材料となります。これに加え、学科や科目区分によっては、学生の履修において必修／自由選択が異なるため、当然それが回答に大きな影響を及ぼしていると予想されます。このような背景を、各学科・各科目区分がどのように捉えられ、評価されているか把握することも、今回の主要な目的の一つとしました。

質問項目ごとの分析評価について

今回の授業に関するアンケート総評は、次のｉからⅲのステップを踏まえて作成しています。

ｉ．授業に関するアンケートの集計は別冊「2017年度春学期 授業に関するアンケート実施結果報告書」にまとめられています。その他、個々の科目（クラス）の集計は、当該授業担当者に配布されています。

ⅱ．教員コメントを専任教員に限って全員に記載していただきました。教員コメントは、アンケートの質問項目ごとにコメントを書いていただく形式のものですが、個々の科目ごとではなく、教員１名につき１枚にまとめて記入していただいています。

ⅲ．学科等の授業評価報告を各学科・科目区分の責任者の方に記入していただきました。各責任者は、当該学科等の個々の専任教員からのコメントや集計結果を基にして、学科等全体としての授業改善、学生の学習行動

の把握、学科等としての到達目標の把握に努めていただきました。

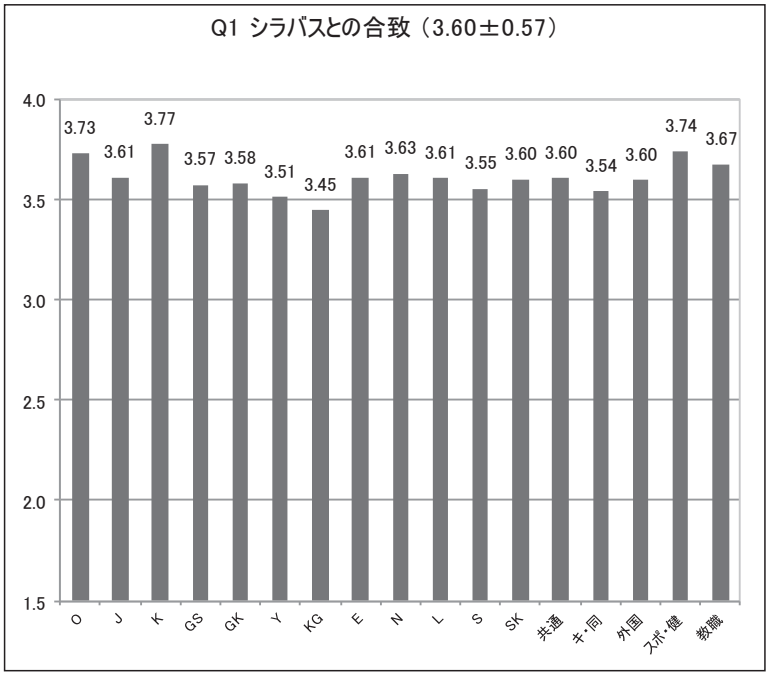
以下の質問項目ごとの分析評価は、原則として次の４項目で構成されています。
ⅰ．教育開発支援センター長によるコメント
ⅱ．各学科及び全学共通の各科目区分の責任者による当該学科等のまとめからの抜粋
ⅲ．履修要項等に掲載された学生に対する質問項目の趣旨の説明
ⅳ．当該質問についての学科等のすべての科目の平均値グラフ（原則として４点満点）

今年度の分析は、各学科等の責任者にとっても教育開発支援センターとしても試行錯誤のなかで行ったため、不十分な点も多々ありますが、今後の本学の教育力の向上のための参考にしていただければと考えています。

（１）「授業実施に関する質問」の結果について

１．授業内容はシラバスに合っていましたか
「Ｑ１シラバスとの合致」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が90％を超えていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業でシラバスに沿った内容が提供されていたと評価できます。もっとも、いくつかの学科・科目区分の報告では、個別授業のなかに低い評価となった授業があり、改善の必要性が指摘されていました。また一部の授業では、受講者数などの諸事情から内容の変更を余儀なくされたため評価が下がった、という報告がなされていました。アンケート結果から、本学学生にとっては、シラバス通りの授業が提供されていることが「当たり前」と受け止められていると推察されます。このため、どのような理由であれシラバスの変更が行われる場合は、当該授業の受講生に対し変更の理由を説明し、それを周知徹底することが求められている、との認識を共有することが必要になると思われます。

【学科等からの報告抜粋】
問題のある科目については原因を追求し解決したいと思う（音楽学科）。一部の担当教員からは､授業進行の流れなどを鑑み、必ずしもシラバス通りにならないこともあった（情報メディア学科）。本年度から始まった新カリキュラムに伴う新しい授業で、受講者数が想定以上に多くなった授業に関しては、やむをえず授業方法を修正しなければいけないケースが生じた（国際教養学科）。３年次は初年度の授業であり、学生の状況に合わせて若干変更した科目や嘱託講師の科目は、評点が低いことから、シラバス作成時からの調整や嘱託講師との調整が必要と思われる（看護学科）。社会情勢に応じてシラバスとは異なる内容を盛り込むことも必要な場合があるとの意見もあった（人間生活学科）。肯定的な評価（そう思う・ややそう思う）の合計が約88％で、多くのクラスで「そう思う」が最多の選択率であった。「聖書Ａ」は、どの担当者もクラスによって「そう思う」の選択率にばらつきが見られ、最大で20ポイント以上の差があった（キリスト教・同志社関係科目）。

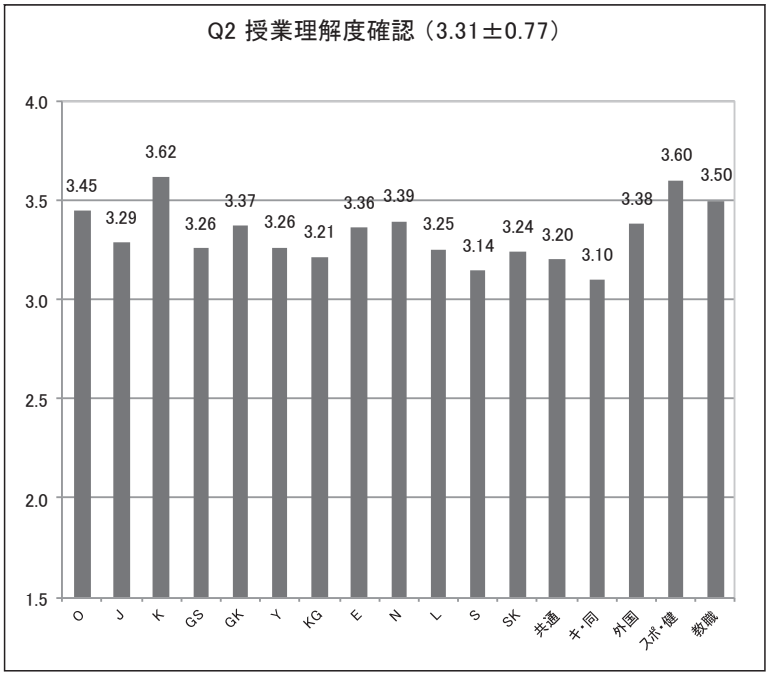


【学生に対する質問意図（履修要項記載）】
正しく回答するためには、受講生も日常的にシラバスを参照していることが前提となります。授業進度などが若干でも修正されたかどうかということが問われているのではなく、シラバスに記載された重要な事項の実施についてどう感じたかを回答してください。

２．受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか

「Ｑ２授業理解度確認」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が70～80％以上となっていました。集計結果から、受講者数の多い講義形式が多い学科・科目区分では、「４そう思う」の評価が下がる傾向が認められますが、これは多様な受講者が含まれる可能性が高くなることから、当然の結果と推察されます。今回の学科・科目区分からの報告では、様々な取り組みが行われていることや、その成否などが指摘されていました。理解度を確認しながら授業を行う方法は、授業形態・受講者数・学生の資質などにより、それぞれ異なることが予想されますが、今後とも試行錯誤を繰り返しながら、より良い方法を模索して行くことが不可欠になると思われます。

【学科等からの報告抜粋】



限られた時間で一定の内容を扱う必要上、致し方のない部分もあると考えられるが､改良方法を考えたいと思う(音楽学科)。出席カードの自由記述欄にコメントや質問を記入させたり、アナライザーを使用して授業の理解度を把握するよう努め、受講者とのコミュニケーションをとる工夫をする授業が多かった（国際教養学科)。受講者数の多いクラスでは評価が低く、少人数の演習クラスでは高くなる傾向がみられた(社会システム学科)。すべての科目において理解度を確かめながら授業を進め、期末テストで最終確認を行っている（医療薬学科)。科目によりバラついている様子であるが、各教員は、授業内容・クラス規模等を勘案し、コメントペーパーやマナビーを導入して、理解度の確認に努めている様子がみられた（人間生活学科)。小テストやレポート課題など、受講生の理解を常に意識し対応した授業・実習・演習を行った科目の評価は高かったようである。実験・実習科目ではほとんどの科目で学生の理解度を確かめながら、授業が進められていた。科目によっては学力差が大きいため、理解度も差が大きいものがあった（食物栄養科学科)。

【学生に対する質問意図】

受講者が多数の場合と少数の場合とでは、理解度を確かめる工夫は異なってきますが、例え受講生が多い場合でも何らかの工夫がなされていたかどうかについてどう感じたかという観点で回答してください。もちろん、受講生としてひとつひとつ理解しながら学習を進めるという心構えを持っていなければ正しい回答は困難になります。

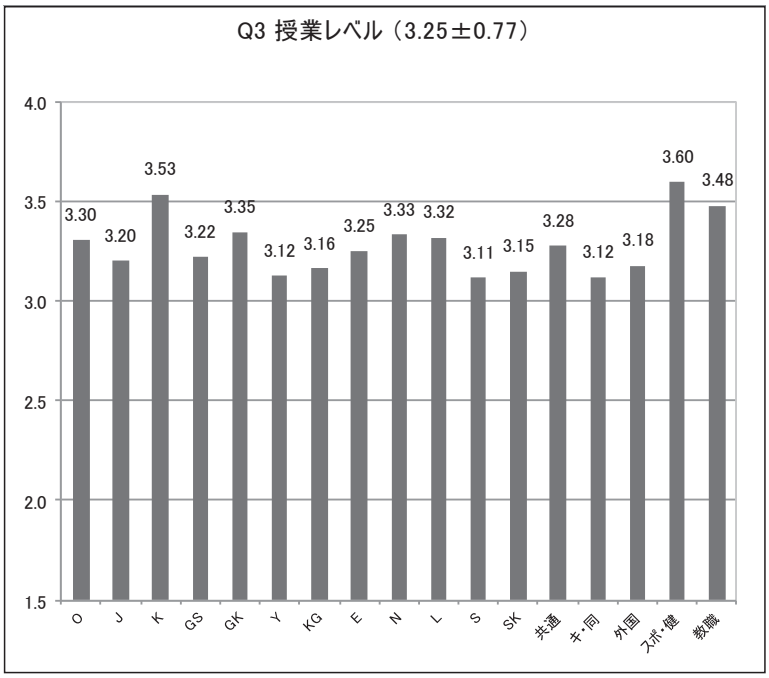
３．授業レベルは自分に合っていましたか

「Ｑ３授業レベル」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が70～80％以上となっていました。集計結果から、国家試験対策など一定水準の知識の習得が求められる一部の学科では、「４そう思う」の評価が下がる傾向が少し認められますが、これも授業の目的が反映している結果かと推察されます。またそうした傾向は、当該学科からの報告でも指摘されていました。授業の目的から、レベルの調整が難しいケースに関しては、カリキュラム全体や授業外でのフォローなどの取り組みも必要になるかと思われます。

【学科等からの報告抜粋】

一部の授業に否定的回答があったが、既に能力別のクラスを設けたりして対応しており、あとはよりきめ細やかに学生たちの能力を見極め、適切に配分する必要があると考える（音楽学科)。平均して約7.5割以上の受講生が授業レベルは合っていると答えている。教員も意識して学生のレベルにあった授業を心がけている。更に努力を促したい（国際教養学科)。大規模クラスでは個別の達成度の確認が小規模クラスに対して難しく、レベル設定についても人数が多いほど難しくなるということが授業担当者から指摘されている。平均値に加えてクラス規模との関連

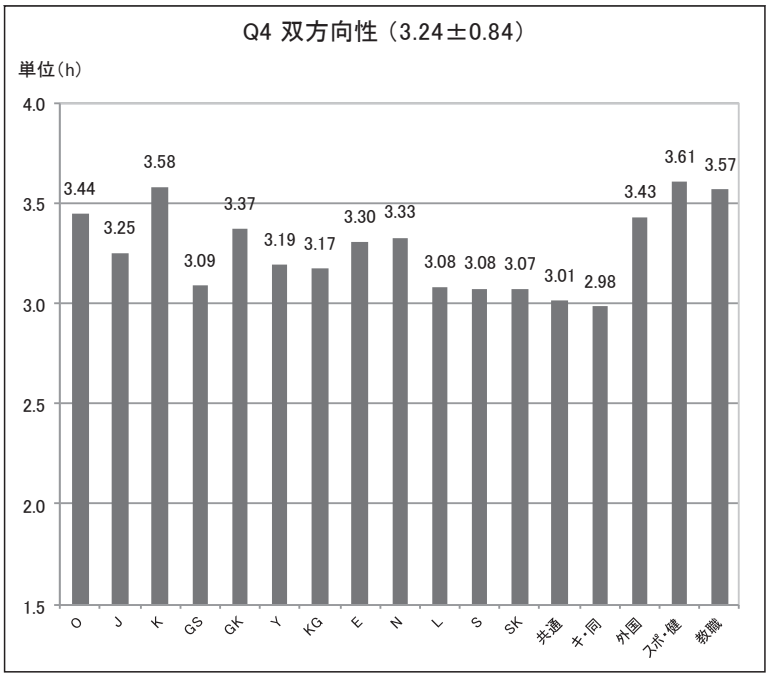
など、丁寧な分析が必要と考えられる（社会システム学科）。すべての学生のレベルに合った授業をするにはもっと教員及びクラスを増やすべきである（医療薬学科）。必修科目は、看護師国家試験受験資格の指定規則に位置づけられる科目でもあるため、レベルを学生に合わせるのではなく、到達度をあげるような工夫が必要と思われる(看護学科)。全学平均より評点が高く、おおむね合っていたと言える（日本語日本文学科）。科目により多様な結果であったが、どのレベルに合わせて授業を実施するかは、教員にとって大きな課題であると思われる（人間生活学科）。「自分に合っている」授業レベルが良いとは限らない。教員の授業レベルを引き下げるのではなく、授業のレベルに学生が合わせることも必要と考える（食物栄養科学科）。肯定的な評価の合計が約75％であった。必修の「聖書Ａ」で、「そう思う」の選択率が最大59.1％、最小10.4％と大きな差が見られたが、肯定的な評価の合計では差は減少している（キリスト教・同志社関係科目）。肯定的な評価の合計が約94％であり、大半のクラスで否定的評価は皆無に近い（スポーツ・健康科目）。肯定的な評価の合計が約81％であった。習熟度別クラスが一定の効果をあげていると考えられる（外国語科目）。



【学生に対する質問意図】
理解しようと最大限努力した上での率直な感想を回答してください。

４．教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか

「Ｑ４双方向性」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が70～80％以上となっていました。集計結果から、受講者数の多い講義形式が多い学科・科目区分では、「４そう思う」の評価がやや下がる傾向が認められますが、これは受講者の人数により取り組みの方法にどうしても制約ができることから、当然の結果と推察されます。ただし、アンケート結果から、本学学生にとっては、双方向的な授業が特別なものではなくなってくると推測されます。また学科・科目区分の報告でも、積極的に双方向性を意識した様々な授業実践が試みられていることが、具体事例を交え少なからず提示されていました。このため、各授業担当者は、どのような授業形態であれ、双方向性を意識した工夫を盛り込むことが、今後ますます求められるようになると思われます。



【学科等からの報告抜粋】

教員一人ひとりの工夫が感じ取れる。コミュニケーションを意識している教員が多い（情報メディア学科）。講義科目に関しては、教員は極力双方向の授業を意識しているが、より一層の努力が求められるケースがあった。想定以上に受講者数が増えた選択講義科目については特に教員中心の講義形式になりがちで、更なる努力が必要で

ある（国際教養学科）。高評価のクラスでは、その理由として、演習クラス等の少人数クラスであったこと、また授業上の工夫としてのコメントペーパーを用いたフィードバック、マナビーの活用などの理由があげられている。一方、授業担当教員のコメントからは、入門科目よりむしろ専門性の高い科目で双方向的な学習形態による履修効果が高いことが指摘されている（社会システム学科）。スモールグループディスカッションを取り入れ、学生同士の話し合いの中で答を導く授業を取り入れている。しかし、覚えなければならない項目が非常に多く、知識のない状態でのスモールグループディスカッ
ションなどのアクティブ・ラーニングの導入は、国家試験の合格率を下げる恐れがあり、時期を見て行っている（医療薬学科）。嘱託講師によるオムニバス科目や講義型の授業での評定が低かった。知識の教授のため、講義中心で授業進行となる科目もあるが、小テストの実施や授業中に口頭での解答を求めるなどの工夫の余地はあると思われる。いつでも個別指導をする旨伝えていた科目でも、評価が低かったことから、学生と教員の認識に差が生じていることを理解した上での対応が必要であると思われる（看護学科）。実験・実習科目では実験台を巡回することや、班のメンバーとの意見交換、グループでの発表など双方向の授業がやりやすく、評点も高くなった。講義科目では、学生への問いかけや課題へのコメント、自由記述欄への記載、学生の発表など双方向への工夫を取り入れている授業に関しては、評点が高くなった（食物栄養科学科）。肯定的な評価の合計が約70％であった。登録者数が100名を超す講義科目でも、ほぼ全てのクラスで肯定的評価が半数を超えていた（キリスト教・同志社関係科目）。

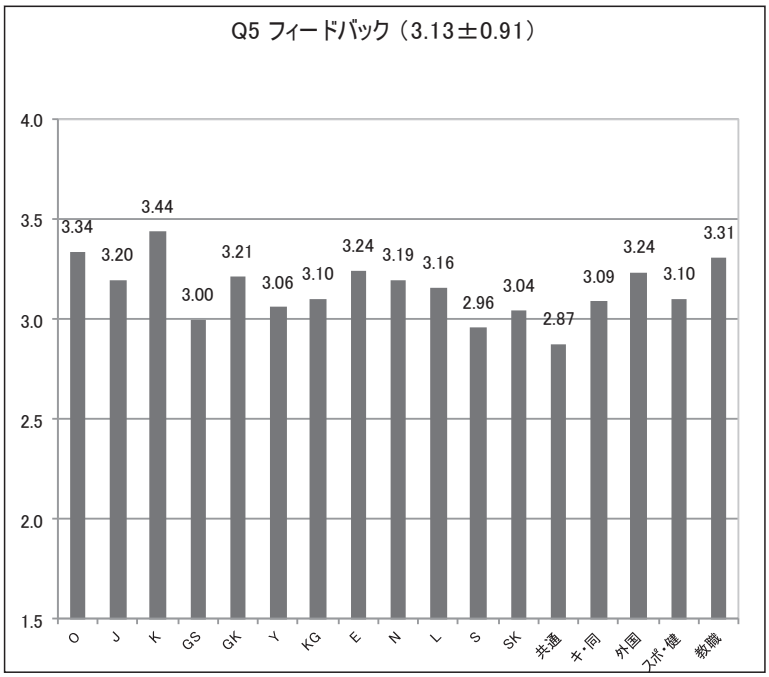
【学生に対する質問意図】

受講者が多数の場合と少数の場合とでは工夫内容は全く異なってくると思われますが、例え受講生が多い場合でも何らかの工夫がなされていたかどうかについてどう感じたかという観点で回答してください。

5．提出物に対するフィードバック（採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われていましたか

「Ｑ５フィードバック」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が50％前後～80％と学科・科目区分でバラつきが認められました。この結果は、受講者数や授業形態によって取り組みに様々な制約ができることが反映していると推察されます。そうした状況に対して、学科・科目区分の報告では、積極的にフィードバックを意識した試みが行われていることが、具体事例を交え少なからず提示されていました。もっとも、フィードバックは、各授業担当者にとって負担増となるため、どうしても出来ることに限界があり、今後はTAやSAなどの授業補助を積極的に活用することが必要になると思われます。

【学科等からの報告抜粋】



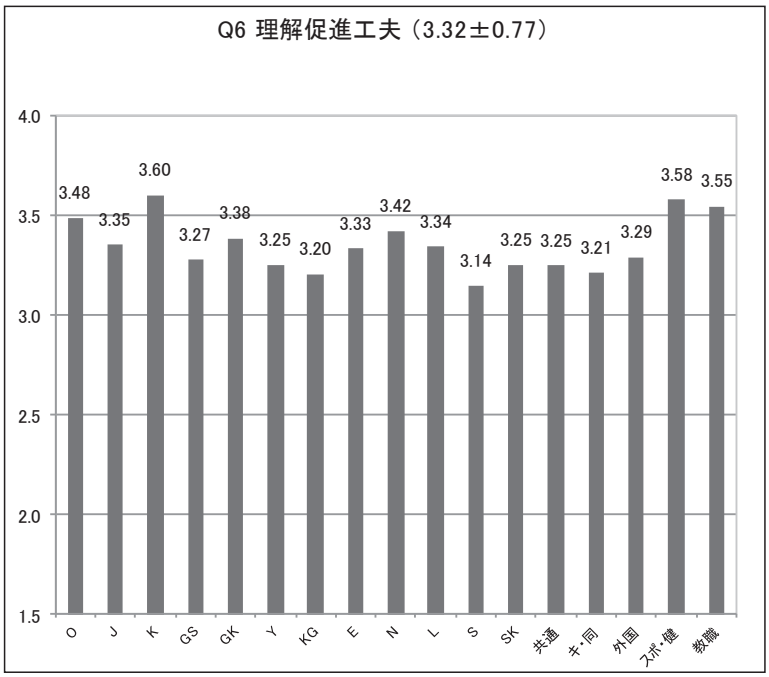
マナビー操作に習熟していない教員がおり、早急にそれは解決されるべきであると考える（音楽学科）。出席カード、マナビーなど、フィードバックを意識している教員が数多く見受けられた（情報メディア学科）。評価の高い科目では、コメントペーパー、小テストのフィードバック、反転学習の導入などの工夫があげられていた（社会システム学科）。提出物にコメントを詳細に記載して、返却している科目についても評定が低いことから、個別の提出物に対するフィードバックについては、コメント方法やタイミング等、工夫や配慮が必要と思われる（看護学科）。実験や実習レポートはその都度採点し、提出翌週に間違った部分がある人に、コメントをつけて返却し、再提出を求めた。この方法により実験や実習レポートの書き方を向上させることができた。講義科目でも、提出物あるいは小テストにコメントを書いて返却した場合は評価が高くなった。レポートで間違いの多い箇所について、誘導式の設問プリントを作成して配布し、同じ実験班の他のメンバーとディスカッションさせた上で記入したプリントを時間内

に提出させ、添削している。提出物に関しては、実験実習科目、講義科目ともにコメントを書き、返却を望む声が多く、そのようにされている科目については評価が高くなった（食物栄養科学科）。

【学生に対する質問意図】
受講生もフィードバックの重要性を認識し事後学習にも力を入れてほしいという願いが含まれています。そのような努力をした上で教員側からのフィードバックが効果的であったかどうかを回答してください。

６．言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか
「Ｑ６理解促進工夫」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が80～90％以上となっていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業で言葉以外によって理解を促す工夫が行われていたと評価できます。これはマルチメディア機器をはじめとする、授業補助機材の活用などが、受講生にも担当教員にも一般化したことの反映であると思われます。もっとも、このような状況であるからこそ、一部の個別授業のなかに低い評価となった授業があり、改善の必要性が指摘されていました。その他、Ｑ４の双方向性やＱ５のフィードバックとの関連性で、いくつかの工夫や取り組みの具体事例の報告がありました。こうした方向性は、今後全体で意識を共有し推進して行くことが必要になると思われます。

【学科等からの報告抜粋】
一部の授業に否定的回答が多く、改善の努力が必要であると考える（音楽学科）。演習科目は、評定が高い傾向にある。講義型科目については、映像を取り入れるなどの工夫は可能と思われる（看護学科）。全学平均より評点が高く、おおむね工夫されていたと言える（日本語日本文学科）。多くの授業において、教員側は工夫を凝らしているように思われるが、受講生に十分に伝わっているか、という点においては更なる工夫が必要な場合もある（人間生活学科）。ほとんどの講義・実験実習科目で教科書を補うため、プリントの配布、ビデオの活用、スライド、マナビーの活用がされていた。実験科目ではデモンストレーションや図による説明などの評価が高かった。授業と実習・演習が連動して行われているので、受講生の理解を双方で確認し、補完し合っていた（食物栄養科学科）。

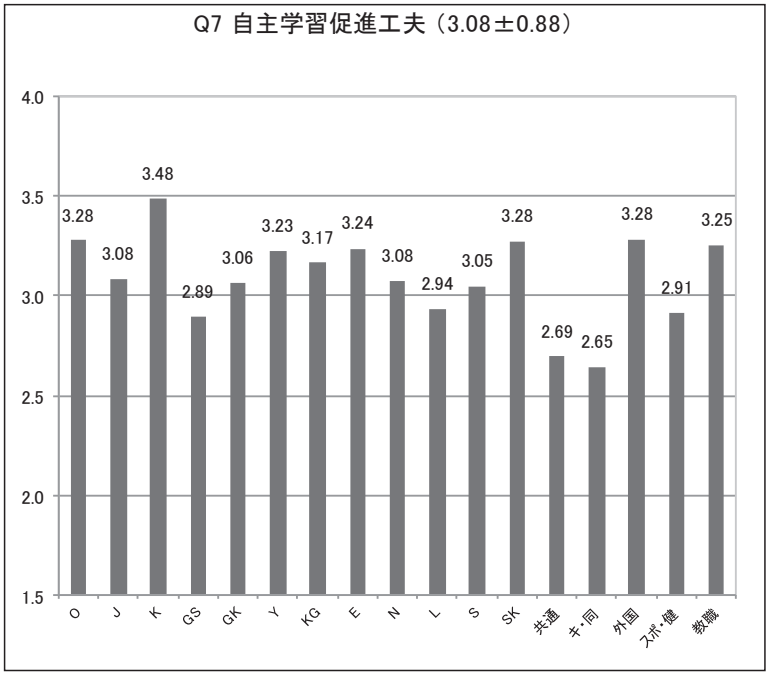


【学生に対する質問意図】
図、表、写真、映像、模型などが効果的に使われていたかという観点から回答してください。受講者側の理解しようとする意欲が前提にあることは言うまでもありません。

７．自主学習を促す工夫がなされていましたか
「Ｑ７自主学習促進工夫」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が50％前後～80％以上とバラつきが認められたものの、ほとんどの学科・科目区分で70％前後の結果となっていました。この結果から、受講者数や授業形態によって取り組みや工夫が異なることが推測されるものの、全体的な傾向として、ほとんどの授業で自主学習を促す工夫が行われていたと評価できます。こうした結果は、Ｑ４・Ｑ５・Ｑ６とも関連するものであり、各担当教員の様々な工夫や試みによって学生に自ら考える機会が提供されていることの反映と推察されます。昨今の入試改革によって、初等教育から高等教育までの学校現場で、自ら思考する力を養うためのアクティブ・ラーニングの導入が急速に進んでいるなか、大学として今後より一層の取り組みが求められる課題になると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

多くの授業では、授業の合間に確認テストを取り入れ、学習を促すことを行っている。テストをするといえばおのずと学習効果が現れる。これを授業中に行わなくてはならないので本来のやるべき授業が制限されてしまう（医療薬学科）。看護技術に関する自己学習は、プラクティカルサポートセンターの環境を整備し、積極的な活用がみられる。一部、他科目の進行との関係で、学習時間の確保が困難な時期もあったため、学科科目での授業進行の調整は必要と思われる。看護技術以外で演習を伴う科目は、理解度を深めるためにも復習、自己学習を促す工夫が必要と思われる（看護学科）。講義科目ではノート作成を促し、ノートのまとめ方などにコメントを書いたり、小テストを行うことで自主学習を促せていた。授業では、予習・復習を学生に積極的に勧めているが、自主学習を促す工夫はレポート課題だけになっていた。実習・演習においてはレポートを課しており、また予習しなければ実験を誤ることがあり、自主学習が促されていた（食物栄養科学科）。



【学生に対する質問意図】

受講生の自主的な学習意欲を高める工夫やモチベーションを高める工夫がなされていたかどうかについてどう感じたかという観点から回答してください。

８．工夫してほしいと思ったことを選んでください（複数選択可、なしも可）

「Ｑ８工夫してほしい項目」は、パワーポイント・話し方・配布資料などで、ほとんどの学科・科目区分で類似した結果となっていました。これらの項目は、本学の受講生にとって学科・科目区分更には授業形態の違いを超えた、改善要求の対象として評価されていることが窺われました。これに対して、マナビーや教科書は、学科・科目区分で比較的数値に差異があり、それぞれの授業の形態・実践・目的などを反映している、と推察されます。実際、学科・科目区分からの報告では、同じような数値でも、それぞれ受講生からの要望に違いがあることが読み取れます。なお残りの項目では、私語対応よりも公平性に対する数値に違いが認められました。また公平性に対する要求は、比較的少人数授業が多いと予想される学科・科目区分で一部高くなる傾向が認められることから、むしろ大人数による講義形式よりも少人数で行う演習形式の方が、教員や受講生同士の関係性が密になることが反映している可能性が指摘されます。こうしたことなどから、Ｑ８の各項目の結果は、授業形態ごとの運営の参考にもして行くことができると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

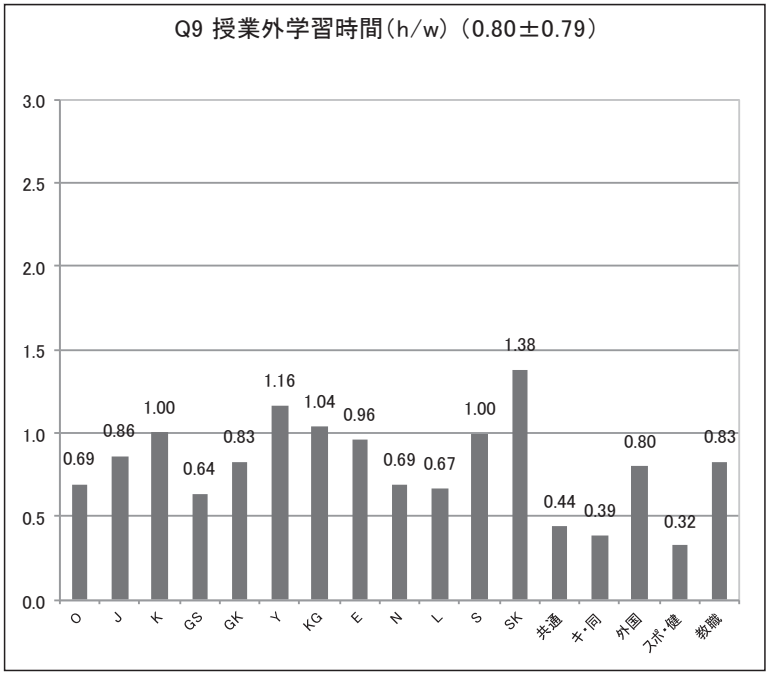
「小テストの正答を配布してほしい」、「ノートを取りきれない」、「教科書がもったいない」など、春秋開講の授業に関しては正答を配布することをしない場合もある。また教科書については、反転授業の意図を理解していない学生もいるようであるが、要検討（国際教養学科）。パワーポイントを使用する講義が多い。しかし、パワーポイントの使用は教員には便利であるが、学生にしてみると知識の定着には至らない。知識の定着にはある程度の期間をおいた繰り返しの試験（再試験）が必要である。また、パワーポイントの使用よりもノートを取らせるためにパワーポイントを板書に切り替える教員も増えている（アメリカではパワーポイントによる授業は学習効果を高めないことが報告されている）（医療薬学科）。「パワーポイント等」の選択率が21.9％で最多であった。「聖書Ａ」の一つのクラスでは「私語対応」の選択率が28.9％と際立っているが、同じ担当者の他のクラスでは登録者数がより多いにもかかわらず特に問題がなく、受講生の態度により環境が変わってくることが伺える（キリスト教・同志社関係科目）。

（２）この授業の学修行動に関する質問結果について

９．この授業の予習、復習、自主学習に１週当たり平均どれくらいの時間をかけましたか

「Ｑ９授業外学習時間」は、まず国際教養学科、医療薬学科、看護学科、英語英文学科、食物栄養科学科管理栄養士専攻を除く学科で、30分未満が50％前後～60％となっていました。また外国語科目を除く科目区分では、30分未満が80％前後～90％となっていました。まずこの結果は、学習時間が短い学科等では講義形式の授業が多いことと、また相対的に学科で学習時間が長くなっている学科等には演習形式などの授業が多いことが反映していると思われます。一方、学習時間が長い５学科１科目区分は、学習しなければ単位を取ることが難しい授業内容が多いと思われます。授業外学習の必要性に関しては、従来から大学教育に指摘されている課題であるため、最優先で改善を考えるべき課題であると考えています。もっとも、学習時間に関しては、ただ闇雲にテストの機会や課題を数多く出すことで改善すべき問題ではなく、どのような目的でどんな学習を受講生に取り組んでもらいたいのか、当然授業ごとに異なることと思われるため、今後議論して行くべき課題であると思われます。

【学科等からの報告抜粋】



全学平均0.80に対して0.64と低かった。演習科目での時間は長く、大規模クラスほど予習、復習、自主学習時間が短くなる傾向が伺える。特に大規模クラスでの自主学習を促す工夫が課題とされる（社会システム学科）。講義中に確認テストを繰り返す授業では学修時間が長くなる。単純に学習時間を他学部他学科のクラス当たりの学習時間とは比較は出来ない。単に講義単位で学修時間をアンケートすることには何の意味も見出せない。また、学習時間は必要に迫られて伸びてくるのが実態で、６年次の薬剤師国家試験の対策として位置づけられている薬学特別演習ｂの１つのクラスで学習時間が他学部に比べて突出するのは、勉強しなければならない時期のアクティブ・ラーニングであるといえる（医療薬学科）。学生は、多くの課題があると言いながらも、平均の授業外時間換算は１週間あたり１時間と、医療薬学科や管理栄養士専攻科目に比べて少なかった。シラバスに予習内容を記すだけでなく、授業ごとに、予習内容や復習内容を説明し、次回の授業の準備を高めるための工夫が必要と思われる（看護学科）。全学平均より低く、例年の事ながら改善の必要性がある（日本語日本文学科）。レポート課題が重いものは学習時間が長く、そうでないものは少ない傾向にあり、強制されないと学習しにくい状況にある。早い時期から、定期試験で確認する事柄（到達目標）を提示しても、十分学習時間をかけて準備することができない学生も少なからずいる（食物栄養科学科）。「英語講読」と「薬学英語」で比較的長い学習時間が取られているように見受けられた（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】

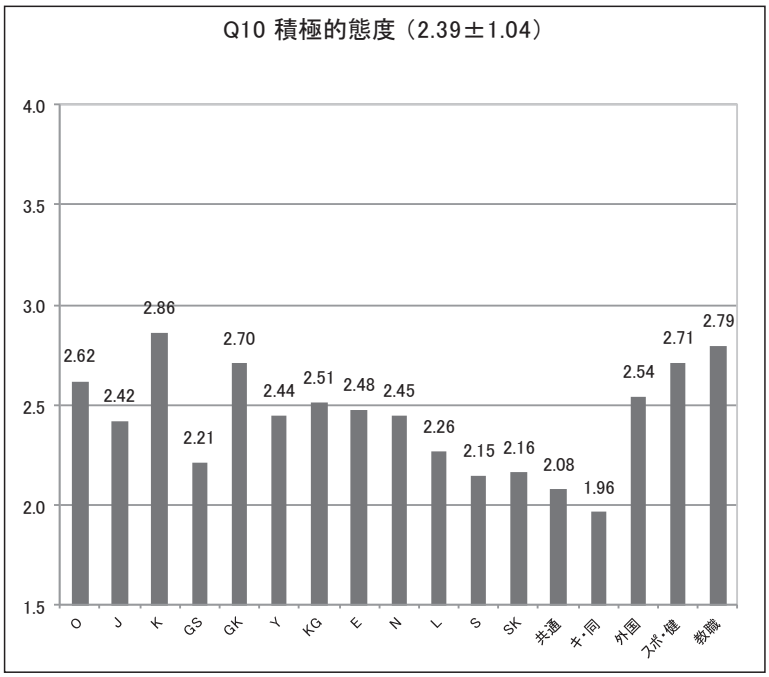
自主学習には、この科目のために意図的に行ったすべての行動が含まれます。十分な授業外学習を行ってほしいという願いが込められています

10．あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか

「Ｑ10積極的態度」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が20％～60％と学科・科目区分でバラつきが認められました。この結果は、受講者数や授業形態による取り組みのあり方などが反映していると推察されます。また注目すべきこととして、Ｑ４双方向性の工夫では、どの学科・科目区分も70％を超えていたにもかかわらず、比較的大きな差異が出たことは、双方向性の取り組み内容のみならず、その機会の回数などが結果として反映したと推察されます。こうした異なる質問項目をクロスチェックすることで、授業改善の方向性を探って行く必要があると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

授業の性質上、学生たちに多くの発言の機会が与えられない場合もあるだろうが、これも授業後であったり、それ以外の機会でも、より積極的に学生たちに意見や質問をする意欲を与える工夫も必要である（音楽学科）。ペア活動やグループ活動を常に取り入れている授業が多く、学生が意見を述べやすい環境づくりが整っている授業が多い。質的に高い意見交換ができる工夫を更に進めていく（国際教養学科）。授業科目により異なるが、教員は学生が意見を述べたり質問したりする機会を増やす工夫を心掛けていると思われる（現代こども学科）。全学平均よりは高いが、より一層の改善が必要である（日本語日本文学科）。実験・実習科目では、意見を述べてもらう機会も設けることができたが、講義科目では基礎科目や資格にかかわる必修科目は教える項目が多く、意見を述べてもらう時間を取るのは難しかった。質問は大歓迎だが、質問に来る人が残念ながら少なかった（食物栄養科学科）。

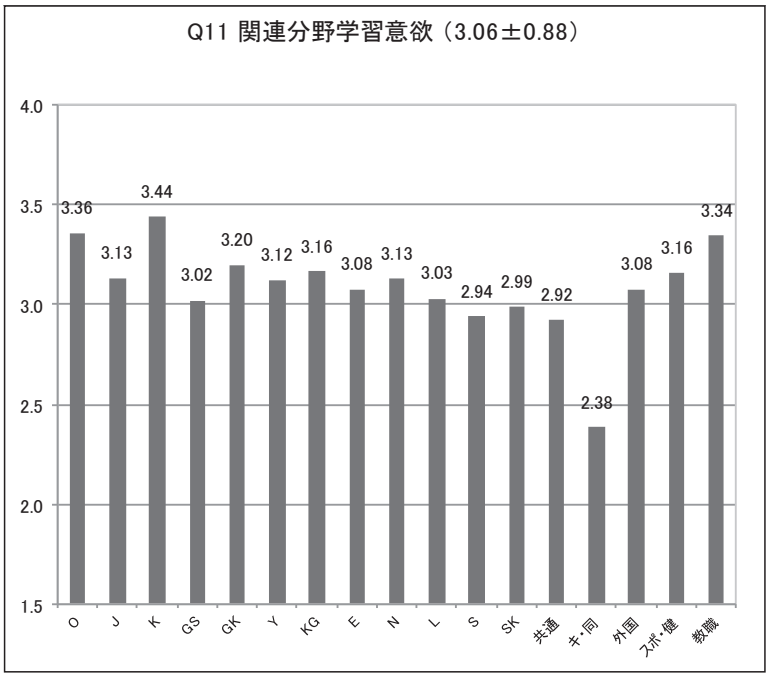


【学生に対する質問意図】

授業中の発言だけではなく、授業（教室）外での質問や、マナビーを使って発言したことも含めて自己評価してください。

11. あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習を更に深めたいですか

「Q11関連分野学習意欲」は、キリスト教・同志社関係科目を除く学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が70％前後～80％となっていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業で本学学生の学習意欲を高める内容が提供されていたと評価できます。なおキリスト教・同志社関係科目に関しては、学科を超え全学共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。ただそれでも40％を超える結果は、受講生に本学の理念が伝わっている反映ではないかと思われます。むしろ、このキリスト教・同志社関係科目での学びを、各学科・科目区分で如何に継承して行くかは、本学全体のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにかかわる重要課題であると認識しています。



【学科等からの報告抜粋】

全体に高い割合で肯定的回答があり、喜ばしいことである。なお一層の学習意欲促進に向けて努力して行きたい（音楽学科）。必須項目以外の科目で、学習を更に深めたいとする評価が高い傾向が指摘された。また、専門基礎演習、応用演習、卒業研究等の演習科目でも評価が高かった（社会システム学科）。学生はどうしても国家試験対策に固執しがちで、学習を深める（応用まで学習する）というより、国家試験を解けるスキルを望みがちであった。知的好奇心を刺激する授業の工夫を行いたい。実験・

実習科目では、学習を深めたいと回答している学生が比較的多かった（食物栄養科学科）。

【学生に対する質問意図】
授業の分野の重要性や面白さが分かり、更に学習を深めようとしているかどうかを回答してください。

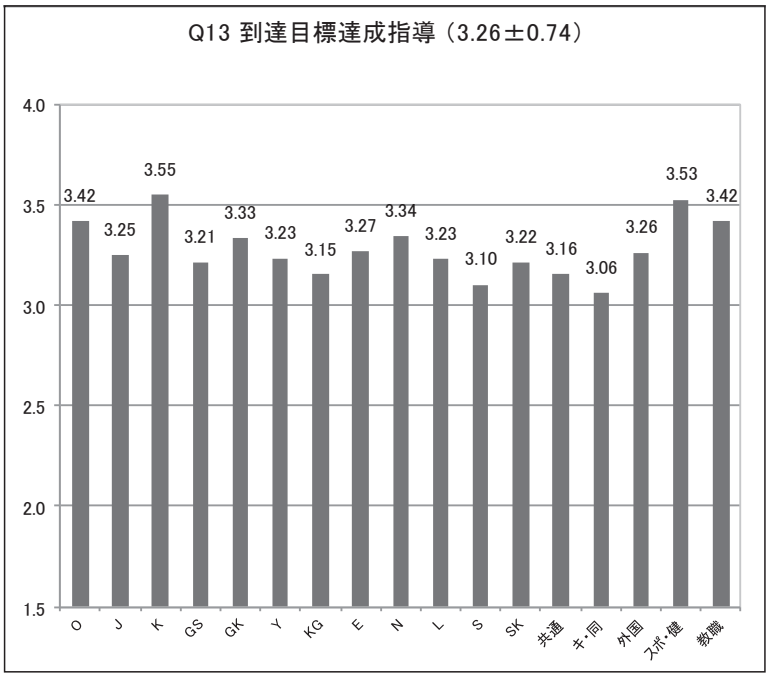
12. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか（複数選択可）
「Q12履修理由」は、６学科・科目区分で「授業内容」の選択率がトップで50％を超えていました。これに対して、これ以外の11学科・科目区分の「授業内容」の選択率は、英語英文学科とスポーツ・健康科目で40％であり、それ以外６学科・３科目区分は10～30％でした。また「授業内容」の採択率がトップでなかった７学科・科目区分の選択率のトップは「必修」と「資格」でした。もっとも、こうした結果は、十分予想されたものではあります。ただシラバスで「授業内容」をしっかりと説明することは、「必修」が少ない学科・科目区分は言うまでもなく、「必修」が多く「資格」取得を目指す学科・科目区分においても重要になると思われます。というのは、「授業内容」の説明は、積極的かつ能動的な授業の履修を促すのみならず、必修や資格取得を履修の目的とされる授業こそ、その内容を受講生に明示することが必要になると思うからです。

【学科等からの報告抜粋】
必修以外は、授業内容という回答が多く、喜ばしい（音楽学科）。授業内容で選んでいる場合が多く、良好な結果である（日本語日本文学科）。科目により多様な回答であったが、総数を見れば、授業内容で履修を決めた学生が多く、本学科の特性を考えると自然な回答結果であると思われる（人間生活学科）。「授業内容」の選択率が58.9％と最多で、他の科目区分と比較して著しく高い。これは科目区分の位置付けから考えて当然の結果と言える。「先輩・友人の勧め」の選択率が19.4％で、他の科目区分と比較して著しく高い（共通学芸科目）。

（３）この授業の到達目標に関する質問結果について

13. 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか
「Q13到達目標達成指導」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が70～90％以上となっていました。集計結果から、担当教員が授業の到達目標を的確に示すとともに、それを受講生の多くが比較的よく理解できていたと推察されます。もっとも、この結果は、単に授業内での説明のみならず、授業実施に関するＱ１～７の工夫や取り組みの蓄積として得られるものと思われます。そういった意味で、各授業担当者は、受講生の資質や要望を見極めながら適切に対応した授業を行うことが、今後とも求められると思われます。

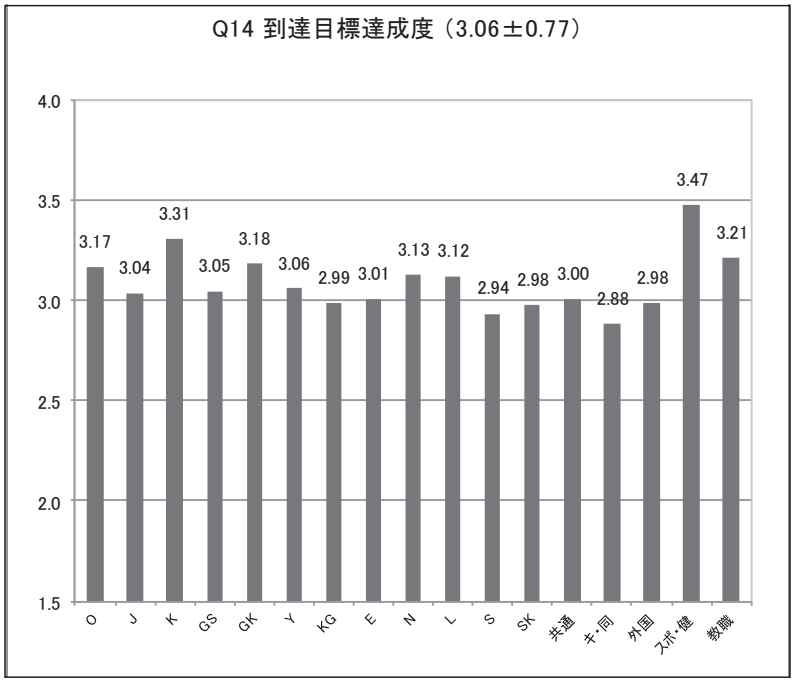
【学科等からの報告抜粋】
授業の冒頭また各授業中に到達目標を意識するような指導を心がけている教員も複数おり、そのような授業では学生も意識的に授業目標を持っていることがうかがえる（国際教養学科）。評価の高い科目では、授業のポイントを明確に授業時に学生に伝える等の指導法があげられた（社会システム学科）。薬学教育コアカリキュラムにより到達目標が定められている。教員はそれに則って授業を組み立てている。学生には入学当初コアカリキュラムを手渡しているが、それを認知しているかどうか疑問である（医療薬学科）。この質問の評定が低い科目は、Q14の質問の評定も低い。評定の低い科目では、到達目標を学生と共通認識することや、授業の中間や後半における到達度の確認が必要と思われる（看護学科）。講義科目と実験・実習科目での傾向はみられず、平均すると全学と同等であったが、



ばらつきがみられた。講義科目では、レポートや資料配布・小テストが効果的にできているものもあった。実験・実習に関して、個人指導ができたことが評価されていたと思われる。実験科目での高評価は、Q４の指導巡回を丁寧に行ったことと連動していると思われる。Q14と人数にするとほぼ同数の「わからない」と回答する学生がいる。到達目標を意識せずに受講しているのか、あるいは、到達目標の意識自体していない学生がいるように思う（食物栄養科学科）。肯定的な評価の合計が約88％であった。担当者や科目により評点分布に大きな差異が見られた（スポーツ・健康科目）。肯定的な評価の合計が約83％であった。担当者や科目により評点分布に大きな差異が見られた（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】
回答の前提として、受講生も常に授業の到達目標を見失わないようにしてほしい、到達目標達成のために努力してほしいという願いが込められています。その上での感想を率直に回答してください。

14. あなたは到達目標を達成できたと思いますか
「Q14到達目標達成度」は、キリスト教・同志社関係科目を除く学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が70％～80％となっていました。この結果は、Q13と相関しています。つまり、担当教員が到達目標を的確に示し、それを受講生も理解していたからこそ得られた結果と推察されます。むろん、どれほど受講生が理解できていたとしても、到達目標の設定が適切でなければ達成という評価が得られることはないため、各担当教員が受講生を目標レベルまで導く授業を行った結果の賜物と思われます。なおキリスト教・同志社関係科目に関しても、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が60％であることから、十分に到達目標の達成が果たされていたと評価できます。Q11でも指摘したように、キリスト教・同志社関係科目は、本学の理念を伝える教育であるため、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにかかわる重要課題であり、各学科・科目区分での継承を考えて行く必要があると考えています。



【学科等からの報告抜粋】
何が到達目標であるかはっきりと学生に認識させることが先決である（医療薬学科）。全学平均より評点が高く、良好な結果である（日本語日本文学科）。概ね良好な結果であった（人間生活学科）。肯定的評価の合計が約62％であった。科目や担当教員による大きな差異や傾向は見出せなかった（キリスト教・同志社関係科目）。肯定的な評価の合計が約68％であった。担当者や科目により評点分布に大きな差異が見られた（共通学芸科目）。

【学生に対する質問意図】
到達目標が複数ある場合でも、全体としての達成度を率直に自己評価してください。

15. DWCLA10の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください
「Q15 DWCLA10の獲得」は、ほとんどの学科・科目区分で「分析力」と「思考力」が高い選択率となっていました。この２項目は、ある意味で学習として基本となる能力であるため、当然の結果と思われます。これに対して、「想像力」・「プレゼンテーション力」・「コミュニケーション力」は、受講生が少人数や演習系の授業が多いと推察される学科・科目区分で選択率が高く、逆に必修の多い学科・科目区分で選択率が低くなる傾向が認められました。この結果から、授業形態や受講者数が項目の選択率にある程の度関係している、という予想されていたことが確認できました。残りの５項目のなかで、「思いやる力」に関しては、現代こども学科・看護学科・キリスト教・同志社関係科目・教職科目などで高い選択率を示していましたが、これは授業の目的を反映した結果であると思われます。なお「リーダーシップ」・「思いやる力」・「変化対応力」・「自己管理力」・「自己実現力」の選択率が低くなって

いますが、DWCLA10の習得はカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに深く関係することから、カリキュラムを検討し全体の習得を達成できる授業を配置して行く必要があると考えています。

【学科等からの報告抜粋】

昨年もそうだったが、リーダーシップが少ないのは、やはりレッスン以外での参加型授業が少ないのが原因であろう。しかし、これもアクティブ・ラーニングの導入により、少しずつ改善されている（音楽学科）。DWCLA10の中で、特に、思考力、分析力が高まったとする回答が多かった。この傾向は、全学平均とも一致する。また、創造性、コミュニケーション力、リーダーシップ、思いやる力、変化対応力、自己管理力、自己実現力に関しては、全学平均を上回っており、社会の中で幅広い領域において包括的に活用し得る汎用的技能を高めるとする学科の教育理念が反映されているものと考えられる（社会システム学科）。分析力・思考力などの数値が高いが、学科の性質上、当然であろう（日本語日本文学科）。DWCLA10の獲得・向上については、学科ごとに特性（違い）が出て当然とも思われるが、「創造力」や「思いやる力」の回答が全学よりも高く、「リーダーシップ」が低いのは本学科の特性であるとも言える。「コミュニケーション力」や「プレゼンテーション力」がやや低い点については、今後の工夫が望まれる（人間生活学科）。実験科目では、「分析力」「思考力」「コミュニケーション力」「思いやる力」「リーダーシップ」「変化対応力」「自己管理力」との回答が高かった。講義科目では、「分析力」「思考力」が高かった。同じ科目で複数クラスあるものを比較するとかなり違いがある。科目内容だけでなくクラスの雰囲気にも左右されると感じた。アクティブ・ラーニングの手法を取り入れることで、プレゼンテーション力が身に付いたと答える学生が増加した。学生の発表時間を設けたので「プレゼンテーション力」の向上が最も多くなった（食物栄養科学科）。「思考力」の選択率が48.4％で最多であった。このことは本科目区分が道徳や社会的・宗教的規範を教えるものでなく、当然のこととして学術的内容で構成されていることを裏付けると思われる。「思いやる力」の選択率が19.7％と比較的高い。このことは本科目区分が建学の精神を伝える役割を果たすことに一定程度成功していることを裏付けると思われる（キリスト教・同志社関係科目）。「思考力」の選択率が49.9％と最多で、「コミュニケーション力」の35.9％を上回っている。「コミュニケーション力」の数値がより高まることが望まれる。「プレゼンテーション力」の選択率が14.0％と比較的高く、話す力についても一定の成果が上がっていることがうかがえる（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】

DWCLA10の力の重要性を認識して、その獲得に向けた努力をしてほしいという願いが込められています。シラバスに記載されていた「力」と異なっても構いません。

（４）その他として記載された学科等からの報告抜粋

一部の科目について否定的な回答が見られるものの、全般的には、音楽学科の回答は全学平均を上回っているものが多い。個々の設問に関してもコメントをしておいたが、そのような否定的回答によって明らかにされる問題点を、これから教員個人個人が一層努力して、授業改善を行っていく必要があると考えている（音楽学科）。科目によるばらつきもあるので、教員間の連携を強めながら、教授法の改善策を共有していきたい。自主性・積極性を養うよう、学生のメンタル面を鍛える必要があろう（日本語日本文学科）。２年次「生物学実験」の復習を兼ねて、マナビーに「マッチの擦り方」「ガスバーナーのつけ方」「無菌操作の基本」動画をアップしたことについて、任意で役に立ったかを問うたところ、3.14（ややそう思う）という結果であった。想像よりは動画を見た学生が多かったことから、一定の効果はあったものと判断された。課題などが多かったり、時間が不十分だったりしたときに１－２名であるが不満の声が上がるように思われる。改善が困難な点もあるが、講義の話し方や教材研究を更に深め、考える力を促す授業にしたいと考えている。学生実験において、全員出席の中全員が提出したが、未回答が３名いたことになっており、白紙回答があったと考えられる。そういう学生がいる、ということを理解しておく必要があると感じた。今回のアンケートは、質問項目が多すぎるように思う。また、学生に質問の意図が伝わりにくい質問もあった。今後の授業改善のため、学生が感じたことを自由記述してくれると非常に参考になるのだが、今回のアンケートは項目ごとの自由記述欄であったためか、ほとんど記入されていなかった。今後の授業の改善に繋がりにくいと感じた（食物栄養科学科）。

まとめ

今年度より、新たに大幅な変更となった授業に関するアンケートについては、様々な評価や意見、更には批判があることかと思います。とはいえ、どのような評価基準であれ完全無欠なものなどはなく、ある基準を選択すれば

別の基準が失われます。更には、評価は決して絶対視すべきものでもありません。どのような評価も、ある特定の基準から下されたものに過ぎず、常に別の異なる基準がありうることを忘れるべきではないでしょう。

このため、評価は下された結果そのものよりも、その結果をどう受け取り、いかに対処するかが重要となります。特に授業評価の目的は、授業内容の良し悪しを測るものではなく、より一層の改善を促すことに他なりません。したがって、もし仮にある基準で高評価の授業があったとしても、別の基準であったならば同じ評価が得られるだろうか、との正しい意味での批判的精神を持ち、より良い授業に向けた改善の可能性を探って行くことが求められます。そういった意味で、今回のアンケートの見直しによって新たに加わった項目は、必ずしもこれまで考えて来なかった改善の可能性に目を向ける機会になると考えています。実際、各授業担当教員一人ひとりのコメントをはじめ、各学科・科目区分責任者からいただいた授業評価報告のなかに、新たな授業改善につながる数々の視点や方向性が含まれていました。

授業評価は、ともすれば社会要請などを受け否応なく実施されているものとの消極的な認識が、現在でも大学関係者の間に少なからず共有されている感は否めません。むろん、そうした認識は、必ずしも否定できない状況があることも事実です。しかし、どのような理由によるものであったとしても、実施することが目的として終わりにするのではなく、授業改善のための検討材料として活用して行くことが求められることに疑いありません。それこそが授業評価の本来の趣旨であり、また授業を履修しアンケートに回答していただいた学生諸姉に対する責務でもあると考えています。

＜凡例＞

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目	L	人間生活学科科目
J	情報メディア学科科目	S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
K	国際教養学科科目	ＳＫ	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
ＧＳ	社会システム学科科目	共通	共通学芸科目
ＧＫ	現代こども学科科目	キ・同	キリスト教・同志社関係科目
Y	医療薬学科科目	外国	外国語科目
ＫＧ	看護学科科目	スポ・健	スポーツ・健康科目
E	英語英文学科科目	教職	教職に関する科目
N	日本語日本文学科科目		

◆ラーニング・コモンズ　利用報告◆

◇今出川キャンパス　楽真館ラーニング・コモンズ

2017年９月、今出川キャンパス楽真館にラーニング・コモンズを開設しました。複数のエリアからなるこの施設は、各種イベントの開催のほか、グループ学習やプレゼンテーションの練習など、様々な形で活用され、学生たちの創造的学習空間の拠点となっています。2018年４月には京田辺キャンパスにも開設される予定です。

１．2017年度　イベント実施状況

	イベント名
９月	ラーニング・コモンズ　オープン記念イベント　LC STAFF によるラーニング・コモンズ紹介
	ラーニング・コモンズ　オープン記念イベント　クイズ・スタンプラリー
10月	秋の宗教教育強調週間　礼拝
	国際教養学科10周年記念イベント
	Ｎプロ　小公演　よだかのほし
	シェイクスピア・プロダクション　SP ウィーク
	スポーツ栄養勉強会
	卒業制作発表　詩の世界～様々な視点を用いて～
	食事管理アプリ「ニャに食べた？」説明会
11月	同志社女子大学ホームカミングデー
	図書館サポーター主催　映画上映会
	生活科学部　金彩のうちわ展
12月	英語英文学科１年次生　Speaking Contest
	英語英文学会創立50周年記念シンポジウム
	女性アクティベーションセンター　女性のための起業家セミナー
	英語英文学科２年次生　Pecha-kucha inspired
	LC STAFF による LC クリスマスイベント
１月	英語英文学科３年次生　Academic Skills Presentation
	情報メディア学科　志プロジェクト　成果発表会
	授業「朗読」発表
	授業「第二言語習得論Ⅱ」研究発表
	生活科学部　HIHUKU 展
２月	英語英文学科３年次生　若本ゼミ・Medlock ゼミ発表会

2．2017年度　平均利用者数

・エリアごとの平均利用者数（9/25～2/5）

エリア	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時	1日延べ利用者数平均
1階													
イベントエリア／グループワークエリア	3.5	6.9	9.7	13.1	24.0	24.9	19.5	20.4	18.6	17.5	11.6	4.0	**160.9**
インフォダイナー	0.5	2.2	4.4	5.2	6.5	7.0	6.4	6.6	5.4	5.4	4.8	2.2	**52.1**
カフェ／グローバルラウンジ	4.0	4.2	8.8	12.5	22.6	16.9	12.6	12.2	10.9	8.3	4.3	1.6	**112.2**
2階													
グループスタディブース	0.0	0.2	0.5	0.7	0.5	1.4	1.2	1.3	0.9	0.8	0.4	0.2	**7.6**
グループスタディルーム	0.3	0.5	1.3	1.6	1.8	4.0	3.3	3.4	2.9	3.0	2.8	1.3	**23.6**
グループワークエリア	0.1	0.3	1.0	1.4	1.6	2.3	2.2	2.1	1.9	1.9	1.5	0.8	**15.7**
ラウンジ	0.5	1.3	2.2	2.4	3.8	4.6	3.0	2.9	2.9	2.8	1.8	0.6	**26.9**
リサーチルーム	1.5	6.4	8.2	9.8	13.5	18.6	15.8	14.6	13.6	13.0	11.0	4.9	**125.2**
ワークショップルーム	0.2	0.4	1.1	1.6	0.8	0.9	1.3	1.5	1.5	1.6	0.8	0.5	**11.2**
エリア合計（LC 全体）	10.2	20.8	35.1	45.5	71.1	76.1	61.3	61.4	55.2	53.3	38.7	15.9	**506.0**

（人／日）

・月ごとの平均利用者数（9～2月）

	1日延べ利用者数平均
9月	276.50
10月	427.42
11月	507.07
12月	586.61
1月	595.85
2月	406.60

（人／日）

◆ FD 活動報告（2017年度）◆

1．本学 FD 関係事業

	内　　容
5月	・2017年度春学期授業に関するアンケート実施案内
6月	・2016年度秋学期成績統計資料配布
7月	・薬学部　FD 講習会（薬学部主催） ・2017年度春学期授業に関するアンケート実施 （実施期間：７月10日（月）～７月28日（金））
9月	・2017年度春学期授業に関するアンケート実施結果配付
10月	・2017年度春学期授業に関するアンケート　教員コメント・授業評価報告書の提出 ・2017年度秋学期授業に関するアンケート実施案内 ・2017年度 FD 講習会　開催（参加者：教員147名、職員8名）
11月	・2017年度春学期成績統計資料配布
12月	・2017年度春学期授業に関するアンケート実施結果公開（本学ホームページ）
1月	・2017年度秋学期授業に関するアンケート実施 （実施期間：2018年１月９日（火）～１月25日（木）） ・第８回アクティブ・ラーニング研究会　開催（参加者：教員125名、職員４名）
2月	・第９回アクティブ・ラーニング研究会　開催（参加者：教員112名、職員４名）
3月	・学芸学部　FD 研究会（学芸学部主催） ・2017年度秋学期授業に関するアンケート実施結果配付 ・2017年度秋学期授業に関するアンケート　教員コメント・授業評価報告書の提出 ・2017年度 FD レポート第11号　発行

2．学外における FD 関連セミナー等案内及び参加者一覧

2017年度は、以下のとおり学外で開催された FD 関連セミナー等について教職員に向けて周知を行い、幅広い学部から参加がありました。

	セミナー名・テーマ等	主催	参加者〈敬称略〉
5月	関西地区 FD 連絡協議会共催事業	大阪大学　他	—
	関西地区 FD 連絡協議会　総会及び講演会	大阪大学	職員１名
6月	New Education Expo	New Education Expo 実行委員会	鈴木健司（教務部長）
7月	教育セミナー＆ワークショップ2017	朝日新聞社	—
8月	FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）Ａ日程	日本私立大学連盟主催	—
	FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）Ｂ日程	日本私立大学連盟主催	—
	KOKUYO セミナー「主体的な学びのシカケ」	KOKUYO	職員１名
	ICT 利用による教育改善研究発表会	私立大学情報教育協会	天野太郎（現代社会学部）、飯田毅（学芸学部）
9月	教育改革 ICT 戦略大会	私立大学情報教育協会	—
	第86回研究協議会	近畿地区大学教育研究会	—
	新任教員 FD 合同研修（プログラムＡ）	大学コンソーシアム京都	—
12月	分野連携グループによるアクティブ・ラーニング対話集会	私立大学情報教育協会	—
	京都大学附属図書館研究開発室セミナー「パターン・ランゲージで読み解くラーニング・コモンズ」	京都大学	職員１名
1月	京都 FDer 塾 × 大学教育パワーアップセミナー　合同企画	大学コンソーシアム京都	山縣恵美（看護学部）、植松紗代（看護学部）
2月	新任教員 FD 合同研修（プログラムＢ）	大学コンソーシアム京都	—
	平成29年度 FD のための情報技術研究講習会	私立大学情報教育協会	—
3月	同志社大学 PBL 推進支援センター主催シンポジウム「ワーキング・コモンズとラーニング・コモンズ～意欲的な学びを誘発する創造的な環境とは何か～」	同志社大学	職員１名
	第23回 FD フォーラム「FD のこれまでと、これから～多様な角度から FD について考える～」	大学コンソーシアム京都	教員26名、職員５名参加予定

ＦＤレポート　　第11号

2018年　３月　発行
同志社女子大学　教務部　教育開発支援センター
〒610-0395　京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8413　FAX (0774) 65-8418
E-mail：kyoiku-t@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ　http://www.dwc.doshisha.ac.jp

D W C L A
1876
EGO SUM VITIS VERA